
EVER... **-美しき穢れた世界に祝杯を-**

雨上霞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EVER . . . - 美しき穢れた世界に祝杯を -

【Nコード】

N6273I

【作者名】

雨上霞月

【あらすじ】

大好きだった故郷を追われ、行き倒れた少女リオは、同じ年頃の少女たちに拾われた。彼女たちと行動するうち、リオは周囲に渦巻く様々な創世の秘密に気付く。

教会に所属し、魔法の源である「魔源郷」を守る守護者達とそれを束ねる聖者との出会い。教会を支配し、少女を追う女神の存在、西で活発化する悪魔たち。戦争、魔王の封印、そして少女の出生の秘密。

やがてそれは大きな渦となって、第二次降魔戦争の勃発へと繋がっ

ていく。

世界が好きなのは、そこに生きる人が好きだから。……だから、世界を諦めない。魔王に世界は渡さない。醜いからこそ愛しい人々が生きる、穢れているからこそ、美しい世界を守るために。

三部構成です。サイトに掲載したものの加筆修正版。

序章

序章

契約は、血の署名で行われた。

神々しいまでに天窓から光が降り注ぐ、純白の神殿にはひどく似つかわしくない契約だった。少年は震える指で、傷口から滲み出る血で自分の名前を書いた。女は微笑みながら少年を見つめている。辺りは目が痛むほどに明るかったが、目眩ましの明るさだ、と少年は感じた。

署名が終わると、女は契約書を取り上げ、こわくてき 蠱惑的な唇をほころばせ、にっこりと笑った。

「よかったわね。これからよろしくね」

鈴の鳴るような声で言って、少年の頬にキスを落とす。くらりとするような良い香りが漂って、少年は頬が熱くなったが、反射的に半歩下がった。幼いながらに、女の狂気を感じたのだ。怖い、と少年は思った。

「グラティアはいいところよ」

女は明るく言う。

「魔力の強い場所だし、暮らしには困ることはないわ。だから、一生出ないで大丈夫なのよ」

少年は敏感に、勝手に外へは出るなという、言葉の裏の意味を感じ取ったが、大人しく頷いた。保護を願うには、彼女にすぎるしかないのは事実だからどうしようもない。女は屈かがんで、彼を引き寄せた。鼻がつきそうなほどに顔を近づけて、甘い声で囁いた。

「いい子だから、約束は守るのよ。そうすれば皆が幸せになれるわ」
ぼくを除いてね。少年は小さく心の中で呟いた。

クローゼラ様、と壇下で臣下が呼ばわった。少年の髪を、白くて細い指でいじっていた女は目を上げた。興味の対象が自分からそれて、少年は心底ほっとして、一步彼女から離れた。臣下の魔法使いは、女王の前でするように膝を床について報告する。

「もう一人見つかりました。レイン・オースティン、地方貴族の子供です」

まあ、と彼女は嬉しそうに笑う。獲物を前にした獣の微笑み、生け贄を前にした神の微笑みだ。

「明日にでも迎えに行くわ。そうね、少し準備をして行きましょう。貴族では厄介だわ」

「はい」

「それと」

早速命を果たそうと踵を返しかけた臣下は、立ち止まって振り返る。クローゼラと呼ばれた女は目を細めた。

「あいつが……エレインが生きているわ。子供を生んだそうよ」

臣下が目を見開いた。少年は顔を逸らす。この人は、またやろうとしている。クローゼラは絶対だ。逆らえない。執念と残酷の塊の彼女が下す命は、いつも一つだった。

「探し出して、始末をおし。できなければ、子供だけはここに連れてきなさい」

は、と短く返事をして、臣下は礼をする。クローゼラがスルリと動いて、臣下の頬に手を添えた。はっと顔を上げた彼の唇に、軽く触れるだけのキスが降りる。彼の頬が真っ赤になった。

クローゼラは少年に見せたように、蠱惑的な唇をほころばせる。「報酬の半分はこれでいいかしら。成功したら、もつといいものをあげるわ。だから、手抜かりの無いようにね」

天上の微笑みは、彼の思考を全て止めるのには十分過ぎる輝きだ

った。少年はそれを苦々しい思いで見ている。

この人は、蜘蛛だ。美しい蜘蛛だ。相手を魅惑し、絡め取り、逃げようものならどこまでも追い詰めて、一度捕まったら最後、逃げられない。そして、それでもなお逃げようとすれば、彼女の手の中に納まるのを拒めば、行く先はひとつなのだ。

少年は天を見上げた。吹き抜けになった天井からは、神殿にふさわしく、神から落とされたかの如くの、光がさんと舞い降りている。偽の光だ、と思った。神は祝福なんてくれはしない。光など、希望じゃない。こんなの、聖なる幽閉ゆうへいでしかない。

臣下が神殿から出て行くと、女は再び少年の傍に寄って、手招きをした。クローゼラが膝立ちになると、少年との目線の高さがほとんど一緒になる。そのまま向かい合い、彼女は彼の肩に腕をかけた。そして、微笑んで首を傾げる。

「いつか、あなたも会うことになるかもしれないわ……。エレインの子だもの、きっとあなたに会いに来る」

また、彼女の目が細められる。残酷な光が、その中に灯った。

「父親は、天使だそうよ。最高位の熾天使ししてんじ。信じられる？」

少年は違和感を感じて首を傾げる。彼女が語りかけているのは自分ではなく、彼女自身みたいだと思った。向かい合っているが、彼女は時々、遠くを見ている。もっとも、いつも目の前のものではなくて、遠くを見ているのかもしれない。

「生まれてはいけない異端の子が、生まれたのよ」

歴史の歯車は、軋みをあげて回り始めた。

第1話 出会い

神々、自らの力を光、闇と四大元素、

すなわち火、水、風、地に分かちて六人の人間に封じ、

もって守護者となす。

かくして魔源郷まげんきょうを守らせしむ。

「創世記」第一巻より

夕焼けでもないのに、世界が赤い。夏でもないのに、汗が吹き出すほど暑い。

「お前のせいだ」

「おまえのせいで、街は焼かれたんだ」

灰色の瞳は、目に吹き付けられる前髪を通して赤い炎の色に染まっていた。

知ってる。

「お前のせいだ、何もかも」

知ってる、と頭の中で答えた。そんなこと、知ってる。

「お前なんか」

呪われてしまえ、異端の子。

呪う言葉は闇となって、燻くすぶりながら自分の中に沈んだ。ぐつぐつと歪ひずんで、輝ひびが入る。修復も、見ないふりも、拒絶もできなくて、ただただ呪いを受け入れて、踵かかを返して森に入った。

暗闇がこんなに心地好く、そしてたまらなく悲しい。もう、

あたしは温ぬもりには触れられない。触れたそばから、シャボン玉のようにばちんと壊れていくから。

雨が降っている。どれくらい人里から離れたのだろうか。これで、壊さずに済むだろうか。優しい世界を、大切な世界を。

雨が頬を打った。

もう動く気力もなくて、銀色の髪が雨で頬に張り付くのも気にならなかった。仰向けに倒れ、灰色の空を見上げていた。土と草の香りが、ひどく胸に染み込んだ。息を吸えば胸が痛い。本当に胸が痛いのか、そう感じるだけだろうか。痛いはずなのに、頭はそれをぼんやりとしか認識しなかった。

目を閉じて、思う。

死にたい。けど、生きたい。

神の創つくったという世界は、こんなにも矛盾しているのだ。

「まあ」

誰かの声がした。

「ねえ、大丈夫？ 意識はある？」

リオは夢うつつに頷いた。

「よかった、生きてる……！ ねえ、オーリイ！ お願い、来て！」

ぱたぱたと足音がする。話し声が出て、リオの体を揺さぶった。

「大丈夫？」

さっきとは、別の声。リオはもう一度頷いた。

「……た……けて」

呟いた声は、果たして音になったかどうか。それきり、リオの意識は絶えた。

目を開けた。意識はしなかった。ただ、自分が目を開けられることに気付いた。見覚えのない天井が、視界を占めていた。

「……………」
リオは数回瞬いて、むくりと起き上がった。力がうまく入らないので、自分がひどく衰弱しているのが分かる。

助かったんだ。リオはぼんやりと思った。そっか。助かったんだ。まあ、いいや、と思った。助かったなら助かったで、その命を大切にしていよう。投げやりに考えて、何気なく周りを見渡した。

ベッドの隣に小さな男の子がいた。きよとんとした顔で、リオを見つめている。くるくるした黄土色の巻き毛に、青い目をしていた。不思議な青だった。青紫から青、青緑へとグラデーションのようになっていた。まだ七、八歳ぐらいのその少年は、透けるように白い肌とくりくりした目をしていて、抱き締めたくなるほどに、この上なく可愛らしかった。

天使みたい、と、天使の容姿など知らないのに思った。
しばらく見詰め合っていたのだが、少年は動かない。

「あ…………えつと…………」
じつと見つめてくる男の子に、リオはどうしたらいいか分からなくなつた。彼は一言も喋しゃべらない。

「…………あなたが、あたしを助けてくれたの？」
すると、少年はふるふるんと首を横に振って、ぱつと部屋から駆け出していつてしまった。

「あ……………」
どうしようもなくて、リオは溜め息をつき、ベッドから降りた。
自分の荷物が部屋に一つだけある机の上に置いてあって、リオは自分が倒れたことを思い出した。途端にギクリとする。まさか、ここ、敵方のところじゃないよね？

慌てて窓辺に駆け寄って、外を確認した。何の変哲もない、小さな町のような町。高さからしてここは二階らしい。夕暮れ時で、人の姿はまばらだった。それ以上でもそれ以下でもない。

ほっと胸をなでおろす。どう考えても、狙った相手を閉じ込めておくには不適切な場所だ。

リオは安心して、机の上の自分の荷物を確認した。全部揃ってる。そのことに更に安心して、リオは荷物を包みなおし、母の形見であるお守りを首からさげ、部屋を出た。

階段を下りると、すぐに喧騒けんそうが聞こえてきた。バイオリンと笛の音、それに男達の笑い声。足を踏み鳴らし、音楽に合わせて机を叩く音。階段を降りてみると、そこは酒屋だった。

ほとんどの席が埋まっていて、大した賑わいだった。皆が音楽にあわせて手を打ち鳴らして、何かを見ていた。リオは男達の視線の先を見た。

カウンターの横の壇上で、少女が踊っている。リオより年上で、十七ぐらいの少女だ。胸の下あたりまである、くるくるした真紅の髪が、彼女の着ている漆黒のドレスによく映えた。目を引かれる美少女だった。リズムに合わせて軽やかにステップを踏む一方で、息はまったく乱していない上に顔は無表情なのが印象に残った。

その時、誰かがリオの肩をぽんと叩いた。思わず敏感に反応して、リオは勢いよく身を引いた。

「あ、ごめんなさい。驚かせてしまって」

すこし驚いたように言ったのは、リオと同じ年頃、十四か十五ぐらいの少女だった。真っ黒い髪は腰にも届くほど長い。彼女はリオの視線を受け止めるとおっとり微笑んだ。その腕に、さっきの男の子がしがみついている。少女も男の子と同じく、透けるように白い肌と、グラデーション色の瞳を有していた。思い当たって、リオ

は少女に声をかけた。うまく舌が回らない気がした。

「あ、すみません。あの、あなたがあたしを助けてくれたの？」

リオが聞くと、少女ははにかんだように笑う。

「何もしてあげられなくて、ごめんなさいね」

肯定の言葉だった。

彼女は人差し指を階段のほうに向ける。

「オーリイの仕事が終わるのは、もうちょっと経ってからなの。それまで上で待ちましょう？」

オーリイ、とリオは反芻した。意識を失う間際、誰かがその名を口にしていた気がする。リオの反応がないのを見て、少女はもう一度言う。

「ね、とにかく、二階に行きましょう？　こんなにうるさくっちゃ、病み上がりの体に障るわ」

少女はそう言うと、リオの手を引いて階段を上がった。

もとの部屋に戻って、リオはベッドに腰掛けた。少女は自分の荷物をいじりながら、リオに尋ねる。

「荷物は平気？　欠けた物はない？」

「……大丈夫です」

何故こんなに親切にしてくれるのだろう、と少し不思議に思った。金目のものは確かに持っていかないけれど、猫ババしたければ、するチャンスは幾らでもあったのに。

少女は小瓶を持ってリオの傍に歩いてきた。それだけでリオは身を硬くする。しゃがんだ少女はリオの反応には気付かず、優しく微笑んで聞いた。

「痛いところはない？」

「あの、いえ……」

「無理はしないで。私たち、数日後には発つ予定なの。私たちがいる間に、治せる傷を治したほうがいいわ」

心配そうに聞いてくるので、リオは少し警戒を解いて、傷口を見

せた。すると、少女は素早く薬を塗って、自分の手のひらを当てる。傷口がぼつと光って、次の瞬間にはかさぶたができていた。

リオは驚いて目を見開く。少女の目の色を見てまさかとは思ったが、やはりそうなのだと思った。

「魔法使いなの？」

聞くと、少女は首を傾げる。

「ちょっと違うけど……そう思っていていいと思うわ。やっぱり、すぐ分かってしまうわね」

「不思議な目の色をしているから……」

魔力を有するものは、そのほとんどが、目や髪の毛が異色に変じる。魔力を持っていても普通の色になることがあるが、その逆はないのだ。

その時、部屋の扉が開いた。入ってきたのは先程下で踊っていた踊り子だ。

「オーリィ」

黒髪の少女が彼女に呼び掛ける。踊り子はちらりとリオと少女を見て、ほんの少しだけ眉を寄せた。

「リディア、あまりむやみに力を使わないでって言ったでしょう」

「だってオーリィ、怪我してたのよ」

怪我を治してくれた少女はリディアという名らしい。オーリィと呼ばれた少女はリオを見つめた。金色の瞳がキラリと光る。この子も魔法使いね、とリオは思った。十七か十八ぐらいに見えたが、年に似合わず、冷静で静かな瞳だった。

「気がついたのね」

言われて、リオは慌てて会釈した。

「あ、はい。……助けてくれて、ありがとう」

オーリィはわずかに頷いた。

「私はオーリエイト・カーマイン。あなたは？」

「リオです」

オーリイというのは愛称か、とリオは考えた。

「リオ……？ 異国風ね」

「大陸の東の果てから来たので」

オーリエイトはそれを聞いて納得したようだった。

「あなた、森の随分奥で倒れていたのよ。怪我もしていたし、すごく弱っていたみたいだから、こんなところに連れてきてしまったけど、構わなかったかしら？」

リディアに問われ、リオは少し迷ったが頷いた。構いはしない。

ついに死ぬと思っていたら助かってしまったただけだ。うっかり人里に下りてきてしまったけれど、彼女たちが数日で去るなら、リオもすぐにまた森に身を潜めれば問題ないだろう。

「あなた、お金は？」

「……え？」

今度はオーリエイトに聞かれて、リオは首を傾げた。

「まあ、森で行き倒れるなら、大して持ってないでしょうね」

リオが答える前にオーリエイトは自分でそう結論付けた。まあ、正しいのだが。

「もう一部屋頼む余裕は私にも無いけれど、ベッドが狭くなるけど、私たちと一緒に泊まると良いわ」

オーリエイトがそうだったので、リオは目を見開いた。

「でも」

「その体で出て行く気？ 無茶よ」

きっぱり断言されてリオは言葉を失う。心配されているとか、親切で言われているとか、そういう声色ではないように聞こえる言い方だった。ただ、事実だけを述べるような。それで少しほっとする。「ありがとう」

オーリエイトは頷いただけだった。

「その子はリディアよ。私は昼間は外に出ているから、何かあったらリディアに言って頂戴」

「あの」

「何？」

リオはためらいがちに、相変わらず一言も喋らず、じっとしている男の子を見た。

「この子の、名前は？」

ああ、とリディアが笑う。

「ノアよ」

その笑顔は温かくて、リオの心は疼いた。

こんな温かいものに、あたしが触れちゃいけない。

第2話 故郷をなくした者

話によると、彼女達は旅の途中らしかった。旅費が足りなくなつたので、オーリエイトが数日ここで踊り子をして稼いでいるらしい。二人ともリオの事情を知りたそうだったが、リオは何も言わなかった。教えられるほど信用していないし、気持ちの整理もついでないし、余裕もない。

しかし、この旅のご一行、二十歳にも届かない女の子二人と小さな男の子。……なんて変な一行だろう。危なくないのだろうか？ うっかり、また自分のせいで炎を見ないようにしなければ、とリオは一人で警戒を強めた。助けてくれた彼女たちが一番弱者らしいのは確かなのだ。

買い出しに行くと言ってリディアとノアは出かけて、オーリエイトもまた仕事に行き、リオは一人で部屋にいた。気がつくとお守りを握ってしまうのは、やはり不安だからだろう。一緒にいた時間は少しだったが、瞳の色が同じなのと、ノアがいつもリディアにくっついていることで、二人は姉弟なのだろうなと分かった。

食事をする時間以外は部屋から出ようとせせず、警戒心丸出しでちっともオーリエイトたちに関わろうとしないリオを、リディアは心配そうに、オーリエイトは無関心そうに見ていた。しかし、ついに翌日の夕方になって、オーリエイトがリオに言った。

「部屋に閉じこもってて退屈じゃないの？ リディアとノアと一緒に外へ行ってきたら？」

リオが断る前に、リディアがリオの手を取っていた。

「ね、一緒に行きましょう？ 夕日が綺麗に見える所を見つけたの。丁度良い時間だし、ね？」

……ね、とまで言われれば断る手段もないだろうに。リオは付いていくことになってしまった。

リディアはいつも、おっとり、フワリと笑う。清楚せいそな白い服を着ているせいで、尚なおのこと天使のようで、そしておとなしく控え目なので、どうしても儂はかなげな印象があった。そのリディアが、息を弾ませて坂を登っている。どこにそんな体力を隠していたのかと不思議になった。しかも、時折ノアに手を貸してもいる。

ノアはというと、息は切らしていたが、相変わらず声は出さなかった。丘の頂上まで来て、ようやく息をつくくと、丁度ちやうど太陽が地平線の向こうに落ちかけているところだった。

赤い光に包まれて、遠くの森も、町も、まるで燃えているよう。けれど、リオの恐れている風景とは違って悲鳴は無く、安穩とした静寂が代わりに町を包んでいた。家々や店にはぼつぼつと灯が点り始めていた。その灯と、家々のガラスに反射する陽光がとても美しい。我が家への帰り道を急ぐ人々の表情には、安堵が溢れていた。全てが静かに賑やかに美しかった。

「綺麗でしょう？」

リディアぽつんと言う。リオは反射的に頷いた。

森の向こうに海が見えないことに、いささか心細いものを感じた。故郷の夕日は、もっと美しかった気がする。大陸の東端ひがしはしの故郷を離れて、幾月が過ぎたのだろう。何人、自分のせいで　してしまっただろう。気がつくと、リディアが自分をじつと見つめていた。零れこぼそうになつていた涙を大急ぎで拭き取って、リオはなんでもない風を装ったが、遅すぎるのが分かった。

「……あなたが見ていたの、ふるさと？」

聞かれて、リオは答えられずに俯く。

「とても、愛していたのね」

リオは、また答えなかった。

「私とノアもね、故郷を追われた身なのよ」

リオは顔をあげて、リディアをみつめた。彼女は微笑んでいた。悲しそうなその微笑みが、今までよりいっそう儚い。

「私たちね、両親を亡くして、兄と一緒に、今住んでいる所に引き取られたの」

兄がいたのか、とリオは少し驚いた。やはり二人と同じ目の色をしているのだろうか、と思う。

「お母さんは生きているはずなんだけど、私たちを迎えに来られないの。今はオーリイと一緒に暮らしてるわ。お兄ちゃんの仕事にいつてるから。もう一度でいい、故郷を見てみたいわ」

リディアの話を聞いて、リオは思わず言った。

「あたしの故郷は滅んだの」

リディアが口を噤んで、驚いたようにリオを見つめた。

「滅んだの。もう一度見たくても、存在すらしてないんだよ」

リディアは慌てた。

「ごめんなさい。何も知らないのに、喋り過ぎたわ、私」

リオは首を横に振った。

「あたし、行くあてなんか無い。ただ、ずっと大陸の真ん中を目指してた」

「そうなの……」

リオは呟く。

「それと、あたしといた方が良いと思うよ」

え、とリディアは声を漏らす。

「あたし、疫病神だから」

沈黙が降りた。

すると、それまで存在しないかのように振る舞っていたノアが、リディアを離れてリオにしがみついた。少なくとも、ノアがリディアから離れたのを、リオは初めて見た。ぎゅう、とリオの胸に抱き付いて、しばらくそうした後、不意に顔を上げて、リオの目を覗き込む。ノアの目は、本当に真っ直ぐで綺麗だった。リオは突然のことに驚いて、ただ、されるがままになった。

リディアが言う。

「その子はね、人を見分ける能力があるの」

何を言い出すのかと、リオはリディアを見つめた。

「何があったのかは知らないけど、あなたは悪くないわ。ノアがそうやって甘えるのは、良い人だけだから」

リオは言葉を無くして、今やリオの手をしつかりと握っている少年に目を向けた。事情を根掘り葉掘り聞かれると思っていた。答えれば彼女たちが距離をとってくれると思っていた。けれど、リディアは聞かなかった。そういえばオーリエイトも聞いてこなかった。ただ、静かに見守っていた。

「何も、聞かないんだね」

ぽつんと言うと、リディアは不思議そうに首を傾げる。

「だって、聞かれたくないんでしょう？」

リオは頷いた。聞かれたくない。距離をとって欲しい。けれど、とって欲しくない。近付きたい。

「だったら聞かないわ」

言って、リディアは笑った。警戒心が解けていくのが分かった。

「あたしのこと、得体が知れないと思わないの？」

「思うわよ」

真つ直ぐに正直な言葉に、リオの心が動く。

「でも、辛いことがあったんだなって、それは分かるから」

リオはリディアに振り向いた。

「そんなに辛そう？」

くすり、とリディアが笑った。

「リオって、結構感情が顔に出るタイプでしょ」

初めて、リディアがリオの名を呼んだ。名前を呼ばれるのでさえ久しぶりで、長いこと聞かなかった響きに、リオの肩が震えた。と同時に、頬が赤く染まる。夕日がその色を隠してくれることを祈ったが、リディアは気付いているだろうと思った。

……この人達は、信じて良いのかもしれない。大丈夫なのかし

れない。

「オーリエイトと暮らしてると言ったね。あなたと、オーリエイトの関係は？」

自分のことは何も話さなくせに、他人には聞くのか、と咎められるかと思つたが、リディアはそんなことも無く、あっさり答えた。「友達かしら。ううん、家族ね。オーリイって冷たそうに見えるけど、すごく優しいのよ。とてもしつかりしてて、頼り甲斐があるし」熱心に話す様子に、リオは思わず笑つた。強張つた笑い方になつたが、それでも自然に漏れた笑みだつた。

「あなたって、警戒心のかけらもないみたい」

言つと、リディアは溜め息をついて頬を押さえた。

「そうらしいのよね。よくオーリイに叱られるわ」

そして、彼女はリオを見つめ、笑つた。リオも笑い返した。うむ、さっきよりはだいぶマシな笑い方だ。

ねえ、神様。

今ならきつと引き返せるから。

だから、もうすこしだけ

この温もりにも、触れていてもいいでしょう？

夕日は、もう地平線の向こうに消えようとしていた。

第3話 仲間

宿に帰ってからオーリエイトも交えて四人で夕食を取った。話しかけた言葉にためらい無く返事するようになったリオを見て、オーリエイトはぼつんと呟いた。

「やっと私たちと話す気になったのね」

リオはオーリエイトを見た。

「よかつたわ」

淡々とした口調の中に、安心と心配がちらついていた。金色の瞳には、温かな光が灯っている。リオはどきまぎして、少し俯いた。壊してしまうことを承知で、温かな空気にもれたくなる。

一足先に食べ終わったノアが、早速リオの側に駆けてきて、リオの腕を掴むとにぱつと笑った。まさに天使の笑顔。まるでぱあつと光が散ったようだった。オーリエイトが、それを見てリオに微笑んだ。初めて見るオーリエイトの笑顔だった。ためらったが、リオも心を込めて笑い返した。

夕食の後、翌日の出発までにもうひと稼ぎするというオーリエイトを残し、リオはリディアとノアと一緒に街の見物にいった。人込みははつきり言って怖いのが、久々にゆつたりした気持ちで周りを見ることができた。

買うお金はなかったが、露店に並ぶアクセサリーなどを、同じ年頃の少女と楽しく会話をしながら見て歩くなんで、今までに無い経験だった。二人で呪符ふしを興味津津で見物したり、ノアにお菓子を買ってあげて、食べる度に鼻にクリームがつくのに苦戦するノアを見て笑いあったりした。信じられないくらい、穏やかで楽しい時間だ

った。

「ねえ、リディア」

呼び掛けると、リディアが振り向いた。長い闇色の髪が翻る。

「うん？」

「あの、ありがとう」

リディアはきよとんとした。

「なにが？」

「助けてくれたこと」

あら、とリディアは笑う。

「お礼はオーリイに言ってあげて。私一人だったら癒しの術をかけるしかできなかったわ。店のご主人と話をつけて一番静かな部屋をもらったのも、癒しの術だけじゃ治らないところを治すための、薬を買うお金を工面したのもオーリイだから」

「うん。オーリエイトにも後でお礼を言う。明日、お別れなんですよ？」

リディアは複雑な面持ちになった。

「寂しいわ」

その一言だけで、リオはじんと胸が痺れた。

「あたしもよ」

本心だった。この数日の思い出を抱えていれば、頑張れそうな気がした。口を開く。少しだけ、話す気になった。

「あたしね、故郷を出てから色々なことがあって、誰も信じられなくなつてたの。人に近付くのが怖くてたまらなかった」

リディアは頷いた。

「でも、リディアやオーリエイトのことは信じたよ。近づけて嬉しかった。あ、もちろんノアもね」

自分の名が出なかつたことで、ぱっと目を上げて縋るような顔をしたノアは、それを聞いて安心したように笑った。リオはそれに苦笑して、リディアを見上げる。

「あの、前から聞きたかつたんだけど」

「何？」

「ノアって……その、喋れないの？」

リディアは悲しそうに微笑んだ。

「ええ。ただ話さないだけなのか、話せないのかは分からないけど」

「そうなんだ……」

少し、同情心がわいた。親をなくして、言葉を持たない幼い弟と一緒に、この少女はどれだけ苦労したのだろう。自分の辛さに引けは取らないんじゃないかな、とリオは思った。比べても意味の無いことだろうけれど。

しかし、でもねとリディアは言った。

「そのかわり、体でいっぱい愛情表現をしてくれるのよ」

「大好きなんだね」

誇らしそうなリディアを見てそういうと、リディアは頷いた。

「大事な大事な弟。この子を守るのには、お兄ちゃんが側にいない今は、私だけだから……私のたった一人の弟だから、私が守るの」
リオは微笑んだ。

「……いいね、ノア。こんないいお姉さんが持てて」

そんな、と姉が頬を染めた横で、ノアは誇らしげに、嬉しそうに笑った。リオも微笑ましい光景に、そつと笑みを漏らす。

その時、喧騒が一段と大きくなった。爆発音のようなものが聞こえて、煙が上がった。聞き覚えのある音に、リオは反射的に振り向いた。今まで毎回、地獄が来たことを告げてきた音だ。黒いマントを着た何者かが、目に見えないのが不思議なほどの意圧力を持ちながら、何かを探すように辺りを見回している。手に持っているのは呪符しゅふか何かだろう。いくら呪符があるとはいえ、ここまでの大爆発を引き起こせたなら、その正体は一つしかない。

魔法使いだ。

来てしまった、とリオは血が凍るような思いだった。

「な、なんなの……？」

事情が分からないリディアは、ノアを守るように抱きしめて、リオを連れて逃げようとする。リオはその手を引きとめた。

「先に逃げて」

「リオ！？」

「あたしが目的だから」

リディアがえ、と目を見開いたその時、相手がリオに気付いた。遠目にも、にやり、と笑ったのが分かった。何の迷いもなく、リオの方へ歩いてくる。町のはずれの一角を一瞬で吹き飛ばした人物を恐れて、町の人たちは悲鳴を上げて逃げ惑い、道を空ける。相手は何の障害もなく進んできた。リオは焦る。

「お願い、リディア、逃げてよ！ あたし、あなた達には無事でいて欲しいの！」

「だめ！ いかないわ！ リオ一人でどうする気！？」

「お願いだから！！」

リディアは激しく首を横に振った。

「リオが一緒じゃなきゃ、逃げない！」

す、と影が降りて、リオは体を強張らせた。振り返れば、忘れようのない冷たい瞳がある。

「どうした、逃げないのか」

わざとらしい抑揚がつけられた声は、静かな残酷さを含んでいた。声の低さからして、男だということが分かる。

「事情が事情なの」

リオは低く呻き返した。男はそれには反応せず、リオの後ろで固まっている少女と幼子を見つけた。

「こいつらは誰だ？ お前に協力者がいたとは驚いたな」

「協力者じゃないわ。行き倒れになってたところを助けてもらっただけ。手を出さないで」

「ほっ……」

相手の目が、面白そうに細まる。

「そうはいかないな。お前がこいつらに事情を話さなかった保障はどこにもないだろう?」

「事情って何、事情って? 何でこんなに付け回されて、命を狙われなきゃいけないのか、あたしは知らないんだよ!」

震えそうになる声で、精一杯怒鳴った。

「もう関係ない人を巻き込まないで! あたしが目的なら、あたし一人を殺せばいいじゃない!」

「残念ながら、火種は一つでも残しておく、いつまた燃え上がるかわからないのでね。これがクローゼラ様の方針だ」

「……クローゼラ……」

呟いたのは、リオ一人ではなかった。リディアも愕然とした様子で、その名前を呟いた。

男は呪符を掲げる。幾何学的に配置された模様が、月明かりに浮かんだ。

「そういうわけだ。さらばだ、リオ・ラッセン……」

リオは必死に、リディアの手を引いて逃げようとした。無駄でもいい、まったく希望がないわけではないなら、今ここで行動しなければ。もう人が死ぬのはこりこりだし、もう何も壊したくない。

刹那、真紅の風が起こった。ふわりと音もなく舞って、リオには分からない言葉を、少女の声が紡いだ。呪符が男の手から弾き飛ばされた。

「オーリイ!!」

リディアが嬉しそうに叫んだ。黒い服に身を包んだ彼女が手にしているのは、紛れもない魔法使いの杖。杖の先には不思議な色をした珠が取り付けられていて、オーリエイトはすばやくその珠を男に突きつける。

「この子たちに手出ししないで」

静かな声が、鋭く響いた。

「この杖、私の力がどれほどのものか、分かるはずよ」

男は目の前に突きつけられている杖を見て、息を呑んだ。

「お前……こんな小娘が……」

「呪符がないと爆破魔法も使えない下っ端とは、訳が違うのよ」

決定打だったようで、男は齒噛みして、その場で別の呪符を出し、呪文詠唱をすると姿を消した。

「移動呪符……まあ、あれが正しく使えるなら、それほど侮った相手でもなかったみたいね」

オーリエイトは人事の様に咳いて、三人を振り返った。

「オーリイっ……！」

リディアは安堵のあまりオーリエイトに駆け寄って、抱きつく。

オーリエイトは彼女の頭をひとつなでて、リオを方を鋭い瞳で見た。リオは俯いた。

「説明、してくれるわね？」

オーリエイトの厳しい声が、胸に刺さる。

「一度店に戻りましょう。こんなことになったんだから、説明してもらわなきゃいけないわよ。あなた一人の問題ではなくなってしまうんだから」

「するよ……」

リオは咳いた。

やはり、こんな風に星の綺麗な夜だった。両親を幼くして亡くしたりオは、教会に引き取られていた。小さくて、村人も数えるほどの村だったが、みんな親切だった。可愛がられ、大切にされ、幸せにくるまれていた日々。それが突然終わりを告げた。……前触れもなくやってきた、一人の魔法使いによって。

「みんな、殺されたの……」

リオはうつむいたまま、淡々と話した。感情を抑えていないと、

すぐにも目から喉から何か溢れそうになる。

「一人も、残らなかった。神父様はあたしを地下の秘密の通路に逃がしてくれたわ。だから、村を焼き尽くした炎も、あたしだけは消せなかった」

誰も、何も言わなかった。

「何が狙いなのかは分からない。あいつは、村の全員を殺さなきゃいけないんだって言ってた。それで、ずっと唯一の生き残りのあたしを追ってきているの」

どうして、こんなことになってしまったんだろう。

「逃げた後、あたしは助けを求めたわ。助けてくれた人はみんなあいつに殺された。いつもいつも、あたしのせいだったの。だから、皆あたしを忌んでた……」

「酷いわね」

リオは首を横に振った。

「皆は悪くない。あたしが悪いのよ」

リディアが肩に手を添えてくる。そのぬくもりが痛かった。いたたまれずに、その手を振り払う。

「あたしに触らないで、死んじゃうよ！」

「リオ……大丈夫よ、私たちはここにいないじゃない。誰も死んでないわ。オーリイがいる限りは、誰も傷つかないから」

「あたしっ……」

涙が、零れた。

「だつてあたし……！」

リオはバツと顔を上げた。ついにこらえきれなくなった滴がポロポロと頬を伝う。

「あたしと関わった人はみんな死んじゃう！ 守ってくれようとすると、死んじゃうの！ 大好きだよ、って言ったら、死んじゃった……もうあたしに言わせないで。あたしに近付かないで！」

こんなに思いのたけをぶつけたのは、本当に久々だ。けれど、辛いことだった。近付かないでというのは本心じゃない。本当は触れ

て欲しい、大好きだよと言いたいの。けれど、近付かないでいうしかないのだ。そんなリオを、オーリエイトはただ静かに見つめた。

「辛かったのね」

リオは目を見開き、俯いた。見透かしたような言葉がこんなにも胸に染みる。自分が零した滴が、足下の床の色を変えているのが見えた。

「大丈夫よ。リオのせいじゃない」

オーリエイトが言っつて、リオを抱きしめた。

「事情は分かつたわ。あなた、行くあてはあるの？」

「無いに決まつてるじゃない……ひたすら逃げるのみだよ。あたしの居ていい所なんてないもの……」

「居場所なら、作ればいいわ」

リオを抱きしめたままで、オーリエイトが言っつた。

「私は魔法使いの中でも力が強い方よ。あなたを狙うあの人たちの正体も気になるから、一緒に来て欲しいの。何日後までと言わずに、これからもね」

リオは驚いて、オーリエイトの腕の中で眼を見開いた。その間にも、涙はぼろぼろこぼれていく。

「いいの……？」

「私のほうから、頼んでるのよ」

リオは目を閉じて、オーリエイトを抱きしめ返した。

「あたし、自分のためには泣かないって決めたのにな……」

呟くと、リディアが言っつた。

「それでも、泣くといろんなものが流せるのよ」

リオは頷いた。こんなことは、故郷を離れて初めてだ。

「一緒に、行っつていいんだね」

リディアもオーリエイトも頷いた。

「もちろんよ、リオ」

第4話 旅の小休止

外に顔を出した途端に、きよろきよろと完璧に挙動不審な行動をするリオを見て、リディアは苦笑した。

「大丈夫よ。オーリイが昨日あれだけ威嚇してたんだから」

「そうだけど……」

心配そうにするリオの隣を、オーリエイトは何のためらいもなく通り抜けて外に出た。

「外にも出られないでどうするの」

呟くように挑発的に言われて、リオは頬を膨らませながら日の光の下に出た。光が眩しい。長いこと感じなかった、朝の清々しさ。

「忘れ物はないわね？」

「ええ」

オーリエイトの問いにリディアが答た。

「じゃあ、いきましよう」

店の主人に別れの挨拶をしたあと、いよいよ出発となった。

「皆はどこに向かおうとしてたの？」

ちらちらと自分達を見る街の人達の視線を感じながら、リオが聞いた。昨日の事件を見ていたのだろうか。

「お兄ちゃんの仕事場所」

リディアが答えた。

「雇主から戻ってくるように要請があったから、迎えに行くの」

え、とリオはオーリエイトを見た。

「あなたなら、あの移動呪符とかいうやつが使えるんじゃないの？」

「使えるけど、あれが作用するのは住所が分かる時だけなのよ。あの子がいるところには住所が設けられてないの」

一体どんなところに住んでいるんだ。リオはついていって大丈夫

なのかと一瞬不安になった。

「でも、そういう公用なら公費とかが出るはずじゃないの？ どうしてお金を稼がなきゃいけないかったの？」

オーリエイトはちらりとリオに目を向けた。

「……鋭いのね。寄りたいたいところがあるのよ。そこまでの旅費」
ふうん、とリオは呟いたが、何かしこりが残るのを感じた。

「そうだわ、オーリイ」

リディアが突然口を開けた。

「夕べのことなんだけど」

「何？」

リディアはいつになく真剣な顔つきになった。声を潜めて、あま
りリオには聞かれなくなさそうな様子だ。

「昨日の魔法使い、クローゼラ様の方針で、リオの村の人は皆殺し
にするんだって言ってたわ」

オーリエイトが立ち止まってリディアを振り返り、眉をひそめた。
「クローゼラ……」

少し考えるような表情をして、オーリエイトはまた前を向いて歩
き始める。前を向いた勢いで、杖についている飾りがシャンと音を
立てた。

「オーリイ？」

何も言わずに進む彼女に、リディアが訝しげに見つめた。

「気にしないで。そのうち話すわ」

意味深だ、とリオは思った。様子からして、彼女たちはクローゼ
ラとやらを知っている。

だが、声の調子などから、別にクローゼラの仲間というわけでは
ないようだった。リオはわずかに震えた。今自分は、自分を狙う人
と関係のある者と、共に行動していると言うことになる。……やつ
ぱり、油断できない。リオはお守りを握り締めてそう思い、悲しい
気持ちになった。

歩いたのは比較的大きな街道で、人も多かった。その中に、少女三人と十歳にも満たない男の子一人の集団があつて、しかもそのうち一人が、明らかに魔法使いの杖と思しきものを持っているとなれば、当然目立つた。

「オーリエイト？ どうして杖を隠さないの？ 凄く目立つてるよ」
ついに視線に耐えかねたりオがオーリエイトに直談判をした。しかし、オーリエイトの答えは至極簡潔だった。

「虫除けよ」

きよとんとするリオを見て、リディアがおずおずと言った。

「あ、あのね、オーリィ。オーリィのそういう簡潔すぎる言葉って、慣れてない人にはすぐ分かりにくいと思う……のよね」

オーリエイトは一瞬間を置いてから、「ああ……」と納得した。
「女二人と子供で旅するのは危ないでしょう。だから杖を見せて、威嚇してるの」

リオはようやく納得して、それから思い出したように付け加えた。
「ねえ、リディアのお兄さんを迎えに行くことは、オーリエイトはリディアのお兄さんと同じところで仕事してるの？」

オーリエイトはリオをちらりと一瞥し、溜め息をついた。

「違うわ。知り合いなだけ。本当は、迎える別の人が行くはずだったんだけど、私が代わってもらったのよ」

大体の事情は掴めてきたが、オーリエイトが溜め息をついたことで質問し過ぎたなと感じ、リオはそれから事情を探るのをやめた。

とにかくオーリエイトは、話しかけないとあまり口を開かないので、リオとリディア二人で喋っているようなものだった。リディアはあまり旅慣れていないらしく、二時間も歩くと辛そうな顔をし始めたので、度々休憩を取った。大きな街道を進んでいるので、随所に休むための小さな村があり、それがとても助かった。心配してい

た追っ手の気配もなく、リオはようやく、ゆっくりと旅を楽しむ気分になってきた。

「魔法って言っても、私が見えるのは癒しの術だけよ」

まだ春とはいえ、昼間は暑い。午後になって一段と暑くなり、小休止にと立ち寄った小さな村で山の雪に砂糖水や果汁をかけた「カティン」というおやつを食べながら、リディアはそういった。

「オーリイは総合魔法使いだから何でもできるけど。それに、私の力は魔法とは少し違うの」

リオは生まれて初めての力ティンを頬張ったまま、もぐもぐと口を動かした。

「でも、変わった目の色をしてるよ」

リディアは迷い、「血筋なの」とだけ言った。その言いぐさに、みんな訳有りみたいだ、とリオは感じた。そして、リオとリディアの間に座っているノアに目を向けた。ノアはカティンがあまりに冷たいので、しょっちゅう頬を押さえている。それでも、相変わらず声は出さなかった。

「ノアにも何か特別な力があるの？」

リディアは首を傾げてノアを見た。

「はつきりしてるのは一つだけ。やたら動物に好かれるのよ、この子。この子も動物が好きだからかもしれないけれどね」

へえ、とリオは呟いた。

そして、唐突に気がついて、あたりをきよるきよると見回した。

「オーリエイトはどこに行ったの？」

「道を聞いてくるって、さっきどこかへ行ったわ」

リオはその返事を聞いて、にわかにな不安になった。オーリエイトがいるから、身の安全を確信していた。逆に言えばオーリエイトがいないと、敵に「どうぞ襲ってください」と言うようなものなのである。さっさと道を聞いて彼女を連れ戻したほうがよさそうだ。

「あの……その寄り道先ってどこなの？」

リディアは困ったように首を横に振った。

「オーリイしか知らないわ」

リオは呆然とした。

「じゃあ、あなた何も聞かずに、従順についていつてるだけなの？」

「え、ええ」

リオはぼかんと口を開けた。

「……呆れた。いくらなんでも警戒心なさ過ぎよ」

「えっ……だって、私オーリイを信じてるもの」

「友達にしたって同じだよ」

「そ、そうかしら……。でもほら、リオはオーリイのことまだあまり知らな……」

リディアが何かに気付いたように、途中で言葉を切った。リオも振り返る。二人がいる店のすぐ脇の路地で、誰かが叫んでいた。村人たちも何事かと集まり始めている。

「何かな」

不安になったリオが立ち上がると、リディアとノアもついてきた。

男を、役人の服を着た若い男が追いかけていた。ここまできて、ようやく役人の叫んでいる言葉がはつきり聞こえた。

「さて、その野郎！ この強盗常習犯ー！！」

村の人達は、関わってとぼっちりを食らうのが嫌らしく、遠巻きにその追いかけてこを眺めている。役人が哀れな気がしたが、リオとて巻き添えは嫌なので村人に混じった。

すると、必死の体で逃げていた男が、リオたちの前と通り過ぎようとしたとき、何かに気がついたように、はたと立ち止まった。何だろう、と見つめ返していたリオは、はっと気付いた。少女二人に小さな子供。誰を取っても格好の人質。嗚呼、ものすごく嫌な予感……と思うまでもなくリオは腕を掴まれ。

捕まった。抵抗のしようもなかった。リディアが悲鳴を上げてリ

才の名を呼んだ。

「動くんじゃねえぞ、お役人さん。動くところのお嬢ちゃんが危ないぜ」

強盗は息を切らしながらも、勝ち誇ったように言った。追ってきた役人は悔しそうに歯噛みする。

「結局あたしってこういう役回りなんだ……」

リオは天を仰いで呟いた。相手の力は強く、振りほどくのは至難の業のようだ。刺激すると逆に危ないので、大人しくされるままになっっているしかない。

優勢になった途端に強盗は役人に一発蹴りを入れた。うっと呻いて、若い役人は体をくの字に曲げる。さらに、強盗は刀を抜いてその役人に切りつけた。リオは思わずひっと息を呑む。血沫が飛び散った。別に重傷というわけではないようだったが、それでも役人は地面に倒れて、痛みで、斬られたわき腹を押さえて悲鳴を上げた。強盗は吼えるような笑い声を上げた。

「諦めて帰るんだな、お役人さん。てめえみてえな若造にや、俺を捕まえるんなら、はなから無理なんだよ」

そのまま強盗は、リオを連れて逃げようとする。ちょっと待て、このまま拉致されるのかとリオはひやりとした。

その時だった。

「はいはい、ちよいと退いてくださいましー」
場に似合わない、気楽そうな声でした。

第5話 護衛

人ごみを掻き分けてひよいと顔を出したのは、リオと同年ぐらいの少年だった。強盗の姿をみとめると、やった、というように笑った。濃い赤茶色の髪をした、無邪気そうな少年だった。

「あ、やっぱり。あんた、連続強盗犯だろ？ お尋ね者の張り紙出てたよねー？ 確か、捕まえた者には四十万とか」

一瞬ひるんだ強盗犯は、すぐ平静を取り繕った。

「お前みたいな小童に俺が捕まるわけないだろう」

「そういう油断が破滅の元なんだよ。それに……」

少年はニヤツと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「女の子をいじめちゃいけないんだ、よっ」

言うなり、少年は隠し持っていた短剣を投げ付けた。不意打ちされた強盗はあわててリオの喉に突き付けていた剣でそれを払う。幸い村人はそれをよけたので、短剣は誰にも刺さる事なく地面に落ちた。

「あれま」

少年は意外そうに呟いた。

「なんだ、結構できんじゃん」

「……この！ クソ餓鬼がっ！」

不意打ちに逆上した強盗はリオを引きずって少年に斬りかかった。すると、少年は軽々と宙返りをしてそれをかわす。あまりの鮮やかさに人々は息を呑み、歓声をあげた。

リオはその声を聞きながら、腕が首に食い込んで苦しいから、捕まえるより先に助けてくれないだろうかと思った。思ったそばからまた引きずられる。少年は今度も軽々とかわした。よほど身軽らしい。強盗が唸りを上げて再度切り付けようとしたとき、ひゅっと空を切る音がした。

矢だった。

強盗の刀を持っている腕のほうの袖に突き刺さり、彼の腕を傷つけることなく、後方にあつた建物の壁に縫い止めた。リオはようやく緩んだ腕からスルリと抜け出した。続け様に、矢が2本飛んでくる。一本は、強盗が慌ててリオを捕まえようとした腕の袖に刺さつて、そちらも壁に縫い止め、もう一本は、強盗の左足のズボンの裾を固定した。その間にリディアが駆けつけて、リオを抱き締めていた。

今や全員が矢の飛んできたほうに注目していた。太陽の色をそのまま写し取つたかのような金の髪をした少年が、弓を構えていた。さらにもう一本。今度は右足のズボンの裾を縫いとめる。これで強盗は身動きが取れなくなつた。強盗は傷ひとつないようだが、驚きのあまり口をパクパクさせている。よくもここまで正確に矢が放つたものだ。

「ライリス！」

はじめの少年が彼に駆け寄つた。

「遅いよ！」

「仕方ないだろう、怪我人を運んでたんだ」

金髪の少年は強盗に目を向けた。

「まったく、狙うのも女、人質に取るのも女、よっぽど女好きなんだね。アーウィン、こいつを縛つといてよ」

赤茶色の髪の少年が頷いて縄を取り出すと、金髪の彼はいまだに地面に転がっている役人に歩み寄つた。

「役人さん、生きてる？」

声を掛けられ、少年の顔を見つめた役人は一回瞬きをしてから顔を真っ赤にした。

「と、当然だっ！」

「ならよかつた。……怪我してるね」

ライリスと呼ばれた少年は屈むと、自分のポシエツトの中から薬草やら包帯を取り出して、てきぱきと手際よく傷の手当てをした。それが終わると、ライリスは役人の肩をぼんとたたいた。

「じゃ、お役人さん。後始末はお願いね」

「えーっ、賞金もらわないの!？」

アーウィンと呼ばれた少年が不服そうに叫ぶ。

「見つけたのはお役人さんのほうが先だっただろう？ それより、君」

ライリスはリオのほうを向いた。リオはビクツとして「は、はい」と答えた。

真つ正面から見ると、彼の目は吸い込まれそうなほど綺麗な緑をしていた。それだけではなく、見惚れたあまり一瞬すくんでしまったほど、綺麗な顔立ちをしている。なるほど、役人が顔を赤らめたのはこういうことだったのか。

線は細いが凛々しくて、通った鼻筋も赤い唇も、完璧な造形をしていた。体つきは少年にしては華奢で、中性的な感じだったが、凛々しい狩人の服装は少年にとてもよく似合っていた。こんな綺麗な人間がいるなんて反則だ、人間じゃない、人形だと思った途端、人形が口をきいた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「あっ、は、はい!」

リオは真つ赤になって叫んだ。

「よかった。女の子二人と子供一人で旅なんて危ないよ」

「は、はあ……」

ライリスはリオに微笑みかけた。とどめだ。国を傾けられそうな微笑みに、周りは一様に魂を抜かれた。

「本当に、どうもありがとうございます」

ぺこぺことおじぎりするリオに、二人は笑って「いいよ」と言った。

結局、強盗は村人と役人の青年に引き立てられていった。その後、助けてくれた二人の少年と、小さな店で早めの夕食を食べた。オーリエイトは腕を組んで、二人に礼を言うリオを見守っている。

「だからむやみに動かないで、って言ったじゃないの」

オーリエイトは、まるで子供を叱るお母さんのような言い方をした。

「言っていない！」

リオが頬を膨らますと、オーリエイトはさらりと返した。

「じゃあ、聞いてなかったんでしょ」

「だって、カティンなんて食べたの初めてで、そっちに心が奪われてたんだよ」

リオが弁解にならない弁解をすると、オーリエイトは呆れたように溜息をついて首を傾げた。

「そんなんでよく今まで、あの魔法使いに狙われて生きてこれたわね」

そりゃあ、ただただ必死でしたから。

「君たちは旅の途中？」

ライリスがオーリエイトに聞く。横顔も綺麗で、思わずまじまじと見つめてしまった。すると、視線に気付いたように、ライリスがこちらを向く。にっこり笑いかけられてリオはあわてて目を逸らしたが、ライリスが再びオーリエイトの方を向くと、性懲りもなくまたその横顔を見つめてしまった。目の保養って、こういうのを言うのね。

「そうよ」

細かい説明をする気はないらしく、オーリエイトは肯定しかなかった。

「へえ、どこまで？」

アーウィンと呼ばれたほうの赤茶色の髪をした少年が身を乗り出す。彼とて顔立ちは悪くなかったが、ライリスの隣だと、どうして

も霞んでしまふのが哀れだ。

「ハーベルド」

「ハーベルド？ そりゃまた辺鄙なところに……」

アーウィンは目をくりくりとさせた。

「ねえ」

ライリスがオーリエイトに向かって身を乗り出した。

「雇用契約しない？」

「雇用契約？」

反応したのはオーリエイトでなく、リディアとリオだった。

「そ。どう見たって女の子と小さい子供だけじゃ危ないよ。護衛するよ」

オーリエイトが口を開いた。

「言っておくけど……」

「あ、報酬ならいらねえよー」

言ったのはアーウィンだった。

「金ならつい最近入ったばかりだしな。山でとれた鹿を売ったんだ。オレたちは単なる興味で動いてるだけ」

ライリスもアーウィンの言葉に笑ってうなずいた。

「好意はありがたいけど、心配要らないわ」

オーリエイトはそういって、杖を召喚して見せた。

「うわあ」

「へえ……」

アーウィンは目を輝かせて杖を見て、ライリスは興味深そうに呟く。

「魔法使いか」

「すげえや！ 杖を持ってるなんて、かなり上級者じゃん！」

オーリエイトはアーウィンを見つめた。

「……詳しいのね」

「だってオレとライリスも同士だもん。だからオレたちを護衛にすればもつと力強いと思うぜ？」

少女三人はそろって目をぱちくりさせた。

「同士？」

アーウィンがこくと頷く。にや、と得意そうな笑顔を浮かべた。

「そ。見えない？」

ライリスはその様子を見て苦笑する。

「まあ、ぼくらは二人とも髪の色も目の色も普通だからなあ」

と、いうことは。

「二人とも魔法使いなの？」

アーウィンはにっと笑った。

「そ。皆なめてかかってくるから、不意打ちに便利だよー、普通の色は」

けらけらと笑う様子はどこまでも子供だった。

「護衛は必要ないわ」

オーリエイトは再度言った。

「そうかなあ？ だって、さっきだってその子が危ない目に遭ってたじゃん」

言いながらアーウィンがリオを見る。リオはそれに対して首をすくめて見せた。

「深い意味はないよ」

ライリスが言った。

「本当に、純粹なる好奇心。ぼくたち二人とも好奇心の赴くままに動いてるから。旅の連れが増えたと思えばいいよ」

オーリエイトは迷うように二人を見た。

「ねえ、オーリィ。いいんじゃないかしら？ 二人とも世間慣れしてるみたいだし、男の人がいると心強いわ」

リディアが口を挟んだ。

「でも……」

「あたしも、いいと思うけど」

リオが遠慮がちに言つと、オーリエイトはようやく頷いた。

「よし、交渉成立！」

ぴょん、とアーウィンがいすから飛びおりる。リオたちもみな立ち上がった。

「あ、そうだ、ライリス。オレ、どうもまた勘違いされてると思うんだけど、あのこと言わなくていいの？」

「ああ……いんじゃないの？ 支障ないだろう」

「ダメダメ、一緒に旅するもの同士、それくらい言わなきゃあ」

えー、とライリスは面倒くさそうに頭を掻く。あまり行儀のいい動作ではないが、彼がやるとものすごく品がよく見えた。

「ねえ、何の話？」

リディアがたまらずに聞いた。

「あのさ、こいつ、どこからどう見たって男だろ？」

「他人のこと指差すなよ」

ライリスは少し頬を染めてアーウィンの指を払いのけた。一同は、オーリエイトですら啞然とした。

「あ……えっと……もしかして……」

「うん。ライリス・ヘイヴン、真正銘の女です」

なるほど、確かに中性的な顔立ち。線が細くて華奢なものもそういうことか。

……って。

「嘘っ!？」

オーリエイトを除いて、周りで（当然ライリス目当てであろう）聞き耳を立てていた他のお客までが、一斉に振り返って叫んだ。

「何か……揃いも揃って皆に男だと思われてたなら、それはそれで

悲しいものがあるなあ……」

彼 否、彼女は周りを見てそう呟いて、苦笑を漏らした。

第6話 悪魔

「ずいぶん所帯が増えちゃったわね」

人事のように呟くりディアの言葉に、オーリエイトはため息をつきながら頷いた。

「出るときは三人だったのに」

いまや、その倍の六人だ。まあ、少年少女だけの集まりなのだから、人数が多いのは悪くないのだが。

「ところでオーリイ、ハーベルドに行つて何をするの？ だって今あそこにはウィルがいるじゃない？」

リオは離れた所で、二人の話し声に聞き耳を立てていた。

「そうね、いるわね」

オーリエイトの返事は、相変わらず簡潔過ぎて的を射ていなかった。

「ねえ、オーリイ。ウィルにはあまり関わらないほうがいいってお兄ちゃんが……」

「鍵を握っているのは彼なのよ」

リディアは俯いた。

「でも……」

「それに、私はもう関わりすぎるほど関わっているわ。彼がグラティアを離れている今こそ、彼に会うべきだわ」

リディアは顔をあげた。

「何かつかんだの？」

オーリエイトは肩をすくめた。

「そういうわけじゃないわ」

オーリエイトはそれ以上話す気はなさそうだった。元々こちらから聞かない限りはあまり自分から話さない人だから、聞けば答えて

くれるかも知れなかったが、リディアはそれ以上詮索しようとしなかった。

「おういっ」

爽やかな朝に相應しい、元気な声が響いた。アーウィンが満面の笑みを浮かべて手を振っていた。

「準備できてるかー？」

「ええ、いつでも出発できるわよ」

オーリエイトがそれに答える。

二人と合流し、一行は村を出た。

リオはつい、気になっていたことをライリスに尋ねた。

「ライリス……あの、夕べはアーウィンと同じ部屋に、と、泊まったの？」

随分と大胆な発言だ。ライリスはさすがに苦笑した。

「そうだよ。大丈夫、彼、女っ気のかけらもないから」

「そ、そう……」

リオはちらりとアーウィンを見やって、確かに、と思った。純真無垢に無邪気が加わって、さらに単純を足したものの塊が歩いていようなものだ。何も無いのに鼻歌を歌って楽しそうなので、見ているこっちが和んでしまう。

「リディアよりも緊張感なさそう」

「そうだなあ、緊張をぶち壊すのは大得意なんだけどね」

「昨日みたいに？」

ライリスはくすくすと笑った。女と分かった今でも、心乱れるしぐさだ。

「そんなとこだね」

その後数日は何ごともなく過ぎ、三日後にはついに街道をそれて、山道に入った。

「辺鄙だとは聞いてたけど」

息を切らしながら、リオが愚痴った。

「一体どんなところにあるの、そのハーベルドってのは」

オーリエイトもリディアもさすがに息を切らしていて、とてもリオの愚痴に言葉を返す余裕はなかった。

「ほいよ」

「ほら、掴まって」

ずんずん進んでいる護衛二人が、急な坂道で手を差し出してくれた。二人とも見た目によらず、力が強い。その手に引き上げられた先に大きな切り株があったので、そこで休憩した。

「この分だと今夜は野宿じゃねえ？」

アーウィンが腰に手をあてて、来た道を振り返って言った。

「この先にロッジがあるのよ。今晚はそこで泊まれるわ」

ちよっぴり久しぶりに、オーリエイトから詳しくて親切な返事が返ってきた。しかし、やはり彼女も息を切らしている。ノアに至っては、胸を押さえて足を投げ出していた。

「まだ小さいのに、随分と過酷な旅に連れてきたね」

ライリスが指摘する。オーリエイトはちらりとライリスを見た。

「ノアのためでもあるのよ」

また主語を省かれた。

「何が？」

リオが聞く。こうしないと、彼女の言いたいことの主旨が分からない。

「この寄り道よ。ノアを喋れるようにしてあげられるかもしれないの」

さすがにこの寄り道理由だけはリディアも知っていたらしく、うん、と頷いてノアを抱き寄せた。リオが聞くに聞けなかった謎が

一つ解け、一行はさらに進んで夕方になった。

オーリエイトがロツジはもうすぐだと言ったときに、ノアが突然何かに怯えたようにリディアにしがみついた。その反応に魔法使い三人がそれぞれの武器を構えた瞬間、脇の茂みから魔物が飛び出した。明らかに普通の動物でも、幻獣でもなかった。禍々しい口を開け、唸り声をあげて突進してくる。

ライリスがすかさず、2本の矢を同時に放って、魔物の両目を潰した。魔物はたまらず悲鳴をあげ、ずぶずぶと地の中に潜っていった。一同はほつと一息をつく。

「変だ」

ライリスが眉をひそめて、燻る地面を見つめた。アーウィンも腑に落ちない様子で腕を組む。

「ホントだぜ。魔物が出るのは日没後って決まってるのに」

「例外もあるでしょう」

オーリエイトが呟いた。

しかし、安心する間もなく、続けて群れが来た。オーリエイトが杖を構える。呪文を唱えると、半分が吹っ飛んだ。

だが、相手が速すぎる。

すると、アーウィンが飛び出して右手を空に掲げた。

「我に従え、火の元素に属するものよ！」

業火が巻き起こって、一気に魔物を襲った。獣の断末魔が、森に満ちる。そろそろかな、とアーウィンは呟いて手を下ろした。

すると炎は跡形もなく消えた。先程までそこに炎が燃え盛っていたことを示すのは、地面に転がる魔物の死骸だけだった。魔物とはいえ残酷な光景に、リオとリディアはうつと呻いて口を押さえた。

「あら、魔法使いが二人もいるの？」

からからと鳴るような声が出て、女が一人姿を現す。黒い翼に、真紅の瞳を有していて、それに気付いたリディアがひっと息を呑んだ。

「……悪魔！」

「こいつら、あんたの差し金か！」

ライリスが声を張り上げた。

「用があるのはそちらのお嬢ちゃんだけよ」

悪魔が言っ指差したのはリオだった。事情を知らないライリスとアーウィンは、驚いたようにリオを振り返る。

「あ、あなたもあの魔法使いの仲間？」

リオは震え声で聞いた。

「あんなのと一緒にして欲しくないわね。わたくしはもっと格が上よ」

悪魔はそういつてくすくすと笑った。

「ね、そちらのお嬢ちゃんをこっちによしなさいな。別に殺しはしないわよ、連れて帰って主人に差し出すだけ」

「クローゼラに？」

聞いたのはオーリエイトだった。悪魔はびつくりしたようにオーリエイトを見つめる。

「あら、知り合い？」

「教える筋合いはないわ」

悪魔を目の前にして、なんとも強気で冷静な発言だ。

「知り合いよね。この先はハーベルドだもの。今あそこにはウィリアム様がいるんだし」

くすくす、と悪魔は笑う。

彼女の言葉にリオは固まった。リディアとオーリエイトと聞いていたのと同じだ。

「もしかして、その子をウィリアム様に届ける途中なの？ だったらわたくしが案内するけど？ それとも、手柄を独り占めしたい？」

リオは血が凍る想いだった。

オーリエイトとリディアに……騙されていたのだろうか。仲間だと信じさせて、リオをそのクローゼラとやらに売るつもりだったのだろうか。何もかも辻褃があっている気がする。悪魔が様付けで呼ぶような相手のところへ、連れて行かれそうになっている。

リオは無意識に逃げ出そうと、一歩下がった。すると、オーリエイトがリオの腕をつかんだ。

「リオ、動かないほうがいいわ」
「放して」

リオは静かに言った。

「慣れてるの。騙されるとか、そういうの。恨まないから、放して」
オーリエイトは悪魔に向けていた目をリオに移す。意味が分からない、というように呟いた。

「リオ？」
「放してっ!!」

リオは手を振り解くと、身を翻して道を駆け戻った。後ろでアーウィンが「おい！」と叫んだが、それでも振り返らなかった。

彼は事情を知らない。分かるはずがない。

ポツリと水滴が落ちてきた。雨が降り始めたのだ。リオは坂を駆け下りる。どうしよう。人里には降りられない。このまま道を外れて山に入ろうか。

「リオ……リオっ!」
息を切らすリディアの声がした。

「リオ、待って。誤解だわ!」
リオは初めて振り返って立ち止まった。ようやくリディアが追いついて、彼女は胸を押さえて息を切らした。長い漆黒の髪が肩から落ちて揺れている。そこに一粒一粒と、雫が落ちて銀の珠のように光った。

「誤解?」

リオは聞き返した。

「私たちは、悪魔の仲間なんかじゃないわ」

「本当に？ あたしを騙してるわけじゃなく？」

リディアは目を見開き、愕然とした。

「リオ……」

「あたしを追ってるクローゼラって人を知ってた。悪魔が様付けで呼ぶ人のところに連れて行こうとした。なのに？」

「ち、違うわ……」

「ねえ、リディア」

リオは言って、笑った。責めるつもりはなかった。誰にだって事情はあると知っていたし、世界はこんなものだとも知っていた。

「あなたはとても優しくかった。オーリエイトも。助けてくれたこと、感謝してる。でも、あなたたちが分からないの」

それでも、触れた温もりは本物だったから。

雨粒が二人の少女を濡らす。

「だから、もう一緒に行かない。あたしを行かせて」

リディアはリオを凝視した。そして、何の前触れもなくぼろぼろと涙をこぼし始めた。リオはさすがに驚いた。

「リディア……？」

「どうして？ それならどうしてそんな顔をするの？ だめよ、行かないで」

リオの体は強張った。

「行かないで……お願い。リオ、そんなんじゃない、あなた、壊れちゃうわ」

リオは目を瞬いた。思わず胸を押さえる。そこでぐつぐつと、闇がくすぶっている。だから、リオが壊れてしまう、とリディアは言った。リオは気付かれたことに動揺した。そして、リディアが泣いて自分にすがっていることにも。

「壊れちゃう……嫌よ、私はこんなに……」

リディアは顔を上げた。悲痛とも恨みとも取れる表情で、リディアはリオを呪ったのだった。

愛、と言う名の呪いを。

「こんなに、あなたが好きなのに」

リディアに呼ばれた時に、立ち止まらなければよかったとリオは思った。

分かっていたのに。あそこで後ろを向いたら、もう後戻りできないということに。

リオは瞑目した。

雨が頬を打った。

第7話 人は、皆……

しかし、すぐに悪魔が二人に追いついた。息も切らさずに、にっこりと笑ってリオに話しかける。

「一人で逃げて逃げ切ると思ったの？ 馬鹿な子ね」

リディアは軽く悲鳴を上げてリオの方ににじり寄った。

「あまり手荒なことをするのはわたくし自身も疲れるのよね。取引しない？」

リオは黙っていた。悪魔との取引ほど、危険なものはない。

「あなたが大人しく捕まってくれれば、そっちの子には傷つけないわ」

リオは唇をかんだ。これも皆の元を去ろうとした理由の一つだった。自分がいると、皆が危険だ。

迷う余地などなかったので、リオは悪魔の方に足を踏み出した。悪魔がにやりと笑う。

「リオ！！ だめ！」

リディアが叫んで、何を思ったか悪魔の前に、ずいと進み出た。

その場で膝をつき、胸の前で手を組んで祈るような格好をした。リディアが口を開く。

その喉から流れ出たのは、歌だった。

天使の歌声というのはこういうものなのだろう。どこまでも透き通り、透明で光にあふれた美しい声。

悪魔はその歌声を聴いた瞬間、笑顔が顔から吹き飛んで、血色を失って後退った。

「お、お前……！！」

リディアはかまわず歌い続ける。透明なものが胸にまでしみこんでくるような気がした。すぐに、悪魔を追いかけてきたオーリエイ

トたちが追いついて、リオとリディアを背後に庇った。

「わかったでしょう」

オーリエイトがひたと悪魔に目を据えて、静かに言った。

「私たちはあなたの思っているような人じゃない。まだここを立ち去らないなら」

オーリエイトは杖を突き出した。

「遠慮はしないわ」

凜と鋭く静かな声は、リディアの歌声に乗って強く響いた。

「クローゼラがなんとしてもリオを連れて行くというのなら、私たちはなんとしてでもリオを連れては行かせない」

リオは最後列で頭をたれた。もう、戻れない。

悪魔は何か言い返そうとしたが、ついに耐え切れず、耳を塞いで数歩下がった。それでも目はちらりとリオを追い、未練たつぷりという感じだった。

「アーウィン」

突然オーリエイトに名を呼ばれ、アーウィンはとぼけた「へっ？」という声を出した。本当に緊張感を壊すのは得意らしい。

「火を」

「い、今!？」

「火は光を持つ。悪魔の苦手なものよ」

言われて、アーウィンはあたふたと右手を掲げた。

「我に従え、火の元素に属するものよ!」

その動作に気付いた悪魔は、あわてて自分の前に何かを敷いた。

オーリエイトがそれに気付き、一瞬しまったという顔をしたが、アーウィンの放った炎はそれすら破った。悲鳴が夜の森に響いて、悪魔はふつと姿を消した。

リディアはようやく歌うのをやめ、はあはあと肩で息をした。

「大丈夫？」

オーリエイトが声をかける。

「無理しなくてもよかったのよ。悪魔の気はあなたには毒でしょう」

「ゆ、油断させられると思って……」

オーリエイトは微笑む。優しい笑みだった。

「そうね、助かったわ。少し休んで」

リディアは頷いて、リオのほうを心配そうに見やった。オーリエイトがリオの傍に歩いてくる。リオの目の前で立ち止まって、まっすぐにリオの目を見つめた。リオは逃げなかった。金の視線が痛い。……私達を信じるか信じないかは、あなたの自由であることは確かだけだ」

少し悲しげな。

「一人で消えるなんてもつてのほかだわ。意地でも追いかけて守るわよ。あなたは一人では危なすぎるもの」

けれども、優しい声。リディアに向けたのと、同じ瞳。

「手をとってくれたんだと思っていたのに」

リオは俯いた。

「ごめんなさい……」

オーリエイトはリオを引き寄せて、少し抱きしめた。

そして、アーウインのほうを向く。

「あなた、火の魔法が得意なの？」

「う、うん」

アーウインはこくりと頷く。

「魔法は少し本を読んで勉強しただけだけど、火の魔法は初めから何の問題もなく使えたんだ」

そう、と呟いて、オーリエイトは品定めをするようにアーウインを見つめた。アーウインはしばらくその視線を睨み返していたが、耐え切れずに聞いた。

「あのさ、何である悪魔、リディアの歌を聴いたら逃げてったの？」

あんなに綺麗な歌声だったのに」

リディアはそれを聞いて、照れたように頬を染めた。リオはそれを見て、やっぱり可愛いな、と思う。

しかし、その次の一言。

「天使の歌だからよ」

自分で言うことではないだろう。話を黙って聞いていたライリスもえっ、という顔をした。自分の失言に気付いたリディアは、あわてて説明した。

「あの、ほら、悪魔と天使って天敵同士じゃない？ それで……ああ、そうよ。あのね、私は天使と人間のハーフなの」

さらりと言うので、ライリスが女であることを告白された時と同じくらい、驚いた。

「天使の！？」

呑み込んだ後は、もう驚かなかった。とても納得できる。リディアは頷いて、自分の目を指差した。

「この色は、天使特有のものなの。天使の歌には浄化作用があるわ。例えハーフが歌う歌でも、悪魔には辛いでしょね。もっとも、悪魔の気だつて天使には辛いものだけど」

「へえ……すごいや」

アーウィンが感心したように呟いた。

「でも」

ライリスが声を掛けた。

「そもそも、どうして悪魔がこんな所に出たんだろう？ 「降魔戦争

で魔王サタンが封印されてから、悪魔は大陸の西端、しかも教会の力が及ばない所にしか出なくなったはずだ」

教会、の言葉にリディアがピクリと反応した。それには気付かなかったように、オーリエイトが答える。

「その通りよ。でも……」

金の目が伏せられた。

「それはもう、太古の昔の話よ」

「悪魔がまた活動し始めたってこと？」

ライリスの問いに、オーリエイトは顔をあげた。強い瞳だった。
「そうよ」

リオの中で、細く一本の線が繋がった。

「あなたたちはずっと、この事に関する情報を集めていたの？」

オーリエイトとリディアは一瞬、緊張気味に顔を見合わせた。

「……そうよ」

「な、何かオレら、大変な旅に同行しちゃったみたいだ……」

アーウィンがいつになく真面目な表情で呟いた。

オーリエイトがリオのほうを向く。

「あの悪魔のせいで状況が変わったわ。リオ、あなたは魔法使いなの？」

リオは首を横に振った。目は灰色で髪は銀、珍しい組み合わせだが普通の色だし、魔力のかけらも示したことはない。

「悪魔まで使って、クローゼラはあなたを手に入れたみたいだから、あの刺客が言うような単純な皆殺しじゃなくて、狙いはあなたそのものはずよ。本当に心当たりはないの？」

リオは愕然とし、首を横に振った。自分そのものが目的？

特別な力も特別なアイテムも、持った覚えはない。自分すら気付いていないのに、なぜか相手が気付いているのなら別だが。

オーリエイトはじつとリオを見つめた。わけが分からない、とその目は言っていた。

「何が目的かは分からなくても、クローゼラが狙っているなら守った方がいいわ」

リディアが口をはさんだ。オーリエイトが頷く。

「そのつもりよ。今日はまず、ロッジに辿り着かなきゃ」

そうだね、とライリスが答えた。

「また変なのが出てきたら困るから、ぼくが見張りをやるよ」

「いいの？」

リディアが申し訳なさそうに言う。

「平気だよ、一晩ぐらい徹夜したって」

「ありがとう。じゃ、行きましょう」

オーリエイトの掛け声で、皆は再び進み始めた。

歩きながら、リオはこつそりライリスに耳打ちした。

「ねえ、あなた、何者？」

「どういう意味？」

ライリスは心外な質問だ、という顔をした。

「前から思ってたけど、あなたの身のこなしとか、すごく気品があるの。さっきは、普通の人は知らない降魔戦争こうませんそうとか、悪魔のことをすごく詳しく知っていたし、教養もあるみたいだった」

ライリスは一瞬黙って、問い返した。

「そういう君は、どうして降魔戦争のことを知ってるの？」

「あたし、教会で育ったの。神話とか創世記とか、よく話してもらったから」

ライリスはじつとリオを見つめた。真剣で探るような目で、リオは必死にその綺麗な目を直視した。ようやくライリスが目を逸らし、溜め息をついた。

「君は可愛い見掛けによらず、鋭いな」

それ以上は何も言わない。リオはあえて追究しなかった。可愛いと言われたのだけが意外だったが、そのことで照れるには、熟慮したい考え事があり過ぎた。どうも……ライリスも、わけありみたいだ。

その夜、リオはなかなか眠れずにいた。オーリエイトの言葉がどうしても胸にしこりを残していた。

相手の狙いは自分　つまりは、故郷が襲わられたのもリオが原

因だと言うことだろうか。リオは布団を引き上げた。やっぱり、あたしのせいなの？ 全部、あたしの……。

異端の子。

リオは布団を引き上げた。いまさらそれを気にしてどうする。こっぴつには慣れているはずなのに。

「眠れない？」

ライリスが声をかけてきた。

「うん……ちょっと」

「まあ、そうだろうね。自分が原因で襲撃されたとなれば、気にもなるだろうね」

低く静かに、ライリスは呟いた。リオはぼんやりとその横顔を見つめた。

月明りに浮かぶそれは、太陽の下の時の華麗さとは違って、儂く可憐な印象があった。金の髪は淡く月の光を弾いて、壁に寄り掛かって物憂げなその様子は、美貌も手伝い、人の目を引き付けずにはいられないものがある。中性的な顔立ちな上、男の格好をしているので今は男に見えるが、女の格好をしたらどれ程の美少女になるか、想像に有り余った。あたしが男なら、一目惚れするところだわ、とリオは思う。同性のリオでさえ見惚れるほど、ライリスは綺麗だった。

「ねえ、ライリスはどうして男装なんてしてるの？」

リオは思わず聞いた。美貌は女の武器なのに。もったいない。ライリスは苦笑した。

「そっちなあ……いろいろ理由はあるけど。一番の理由はこの格好が一番ほくらしいからだろうね」

「ライリスらしい？」

確かに、似合ってはいる。

「ぼくが一番、ありのままの自由なぼくでいられる格好だよ」

笑顔の裏に、何かが見えた。軋み。歪み。この人のなかでも、闇が燻っている。リオはそれを感じ取りながら、差しさわりのない返事を返した。

「ライリスは、自由が好きなんだね」

うん、とライリスは頷いた。

「風のふくままま気の向くまま、自分らしく生きる。これがぼくのモットー」

冗談ぽく言うので、リオはくすくすと笑った。

「ほら、おやすみリオ。明日倒れたら話にならないよ」

ライリスの言葉に、リオはうんと頷いて目を閉じた。

人は皆、闇を内に持っている。

第8話 ウィリアム

翌日はさらに、森の奥深くまで入っていった。こんな山奥に、本当に人が住んでいるのだろうか。ウィリアムとやらは本当に安全な人物なんだろうか。一緒に来ると決めて、本当に正解だったのだろうか。

歩き続けて疑問は膨らむ一方で、ついに道が消えた時には不安は頂点に達した。しかし、先導役のオーリエイトはよどみない足取りで進み続ける。

前日からの疲労が溜まり、ずっと元気だったライリスとアーウィンにまで疲れが見え始めた頃になって、ようやくオーリエイトは遠くを指差した。

「あそこよ」

うわ、とアーウィンが声を漏らした。緑に覆われた大きな屋敷だった。柵で囲いがしてあって、入口から館の玄関まではレンガ畳が敷かれている。その小道の脇には、花がありとあらゆる彩りを添えていた。

遠目にも、派手に飾らないとはいえ豪華であることは分かった。

「似合わないなあ、こんな山奥に……」

ライリスが呆れたような声を出す。

「なんだか、少し教会の造りと似てるね」

リオが呟くと、オーリエイトとリディアがちらっとリオの方を見た。やはり、この二人は「教会」の言葉に反応する。

足場の悪い道を歩いてやっと門についたら、門は閉まっていた。

「鍵の呪文がかけてあるわね」

オーリエイトが少し門を調べ、そう言った。

「ええっ、じゃあどうやって入るつもりなんだよ！」

アーウィンが叫んだとき、柔らかい声がした。

「ご心配は要りませんよ」

一人の青年が、門に向かって歩いてきていた。彼が手を一振りすると、門はガチャンと音を立てて開いた。

青年は顔を上げて微笑んだ。漆黒の髪を無造作に束ねて、眼鏡をかけている。年は二十歳にはまだ届かないだろう。十八、九辺りだろうか。優しそうな笑顔は、人に光を届けるような印象がある。そして、皆は一様に、その瞳を見て息を呑んだ。

「お久しぶりです、オーリエイト。手紙は受け取りましたよ。予定より早かったですね」

青年は言った。

「しかし、今回はまた大人数ですね」

「二人は護衛よ」

オーリエイトが答えた。

「そうですね。部屋はたくさんあるのでご心配なく。……あなたがリディアさんですね。こちらが例の弟さんですか？」

「は、はい」

リディアが緊張気味に答えた。初対面らしい。

「兄がお世話になってます」

リディアは言ってぺこりと頭を下げた。

「いいえ、私のほうこそ」

青年は丁寧に答える。そして、全員を見渡した。

「オーリエイト以外の皆さんとは初対面と言うことでしょうか」

皆の視線は彼の瞳に釘付けになる。その目は、あまりに奇異すぎた。左目が深い水底の青色、右目は太陽の金色。

神聖視されているオッド・アイ、だった。

彼は笑った。フワリと微笑む笑いは優しい。

「はじめまして。ウィリアム・チェスターと申します」

落ち着かない。ものすごく落ち着かない。こんなリッチなところ、庶民のあたしには似合わない。

リオはそわそわと部屋の中を歩き回った。みんなで必死に「一つの部屋で雑魚寝しますから！」と言ったのに、ウィリアムはそれではお客様に失礼ですから、と迎賓部屋を一人に一部屋ずつ割り当てたのだ。

アーウィンなどはわーいわーいと言いながら、ふかふかのベッドの上で飛び跳ねていたが、豪華なものに慣れてないリオには、なんだか窮屈に思えた。

その時、誰かが戸を叩いた。

「リオ？」

リディアの聲がして戸が開く。

「こっちに来てもいい？ ノアと二人きりであんな豪華な部屋にいと、私落ち着かなくて」

リオは苦笑した。

「あたしも。入って」

リディアはほっとしたように笑って入ってきた。その後、ノアが続き、リディアが戸を閉めている間にリオに抱き付いていた。きゅう、と抱き締めてくるのが可愛くて、思わず頭を撫でてしまう。

「いいなあ、兄弟がいて」

リオが言うと、リディアはふふ、と笑った。

「そういえばオーリエイトは？」

「ウィルの所。聞きたいことがたくさんあるみたい」

リオは首を傾げた。

「ウィリアムさんって、何をしてる人なの？ こんな所に住んでるし、リディアのお兄さんの上司みたいに言ってたし、悪い人ではなさそうだけど悪魔に様付けで呼ばれてたし、偉い人みたいだけであ

んなに謙虚だし」

リディアは少し笑った。

「ウィルが謙虚なのは性格よ」

「そうなんだ」

兄からたくさん話を聞いているのだろう。同じ初対面でも、リディアはウィリアムをよく知っているようだった。

「リオは教会で育ったんだから、あのオッド・アイでウィルが誰だかは分かるでしょ？」

リオは首を傾げた。

「ええと……」

記憶を手繰る。オッド・アイ、オッド・アイ……。

「あ」

リオは息を呑んだ。

「まさか……聖者？」

リディアは頷いた。聖者と言えば、この国で絶大な権力を誇る教会で、トップに立つ人物のはずだ。他の者より遥かに強力な魔力の持ち主で、その魔力のせいで変異が起こり、聖者はオッド・アイになるのだ。リオは仰天した。

「だって、聖者ってめつたに人前に姿を現さないんでしょ？ それに、なんでこんな山奥に……」

「ここは聖者の、そうね、別荘とでも言えばいいのかしら。外に出ることが許されない聖者のために作られた、心の避難場所よ」

リオは絶句した。

「あ、あたしっ……聖者に会えるようなご身分じゃないわ！」

「あら、私だってそうよ。オーリイだって。皆本来なら門に近付いただけで文字通り即門前払いの人達ばかりよ」

「じゃ、なんであたしたちここにいるの!？」

「オーリイが連れてきたからでしょ？」

ああダメだ、とリオは頭を抱えた。ずっとオーリエイトと一緒にいたから、ついにオーリエイトの言葉省き癖がリディアにも移った

のだろうか。

「だから、そのオーリエイトはなんでそんなお偉いさんと知り合いなの？」

ああ、トリディアはようやく納得した顔をした。ダメだ、本当にオーリエイトの癖が移ってる。

「私がオーリイと知り合う前から二人は知り合いだったの。そもそもオーリイと一緒に暮らしてるのだから、お兄ちゃんづてにウィルが紹介してくれたからなのよ」

「そういえば、あなたのお兄さんで、ウィリアムさんの部下みたいなものなのよね？ 教会の人？」

リディアは頷いた。

「そういうことになると思うわ」

「オーリエイトは何のお仕事をしてるの？ オーリエイトとも仕事での知り合い？」

聞くと、リディアは首を傾げた。

「よく、わからない。オーリイはいつも踊り子とか歌を歌って稼いでるわ。魔法で稼ぐこともあるけど、あまり好きじゃないみたい。

教会の人じゃないと思う。ウィルとどうやって知り合ったのかは知らないわ。始めから御互い何か暗黙の了解みたいなのがあって、御互い干渉しないけど信頼しあってる……そんな感じ」

「……じゃあ、リディアは何も知らないの？」

リディアは微笑んだ。

「知らなくて、いいと思うの。オーリイってたくさん秘密を抱えているみたいだから……。いつも、たくさん情報を集めてる。悪魔たちに関する情報、それにウィルやお兄ちゃんたちの情報……。何か大きなことをやろうとしてるのは分かるけど、私が事情を聞いたところで何の力にもなれないし。オーリイが話したくないなら、いいと思うの。私、本当に心底オーリイを信じてるから」

リオは何も言えなかった。

「あたしは、知りたいと思うけどな……」

リオは呟く。

「オーリエイトを見てるとね、何でも一人で抱えてるように見えるの。いつも自分一人で納得した顔をしてる……」

「それって、私たちを寄せ付けたくないってこと？」

リディアは首を傾げて聞いた。リオは首を横に振る。

「あたしたちを寄せ付けたくないと言うより……」

リオはいい言葉を探した。

「一人でずんずん進んでいって、そのまま消えてしまいたいような感じだよ」

リオはぼつりと言った。リディアは言葉をなくして、じっとリオの顔を見つめていた。

ライリスは、庭で散策していた。アーウィンなら一人でも楽しんでいるだろうから、何も心配せずに出てきた。

「……よく造られた庭だね」

咲き誇る花は、それぞれ数株ずつが同じ種類で、どれもこれもみな薬草だったり魔法薬の材料になるものだった。おまけに、館の裏には、小さなものとは言え神殿すらある。ここまできて、自分が聖者であることを、聖者に忘れさせないために作ったように見えない。ならない。

「難儀だなあ……聖者さんも」

呟いてしゃがむと、本人から返事が来た。

「それはどうもありがとうございます」

ライリスは振り返りもせず、ただくすくすと笑った。

「直々のお出ましですか、ウィリアム・チエスターさん」

「……………」

返事はないが、微笑が彼の顔から消えているのがライリスには分かった。

「どついうおつもりですか」

困惑と、不満の入り混じった声。ライリスはそれを聞いて、肩をすくめた。

「……やっぱりぼくを見知ってたんだね。ただの気まぐれですよ。干渉する気はないから安心してください」

「『ぼく』、ですか……」

困惑気味に言うウィリアムに、ライリスは苦笑した。

「構わないじゃないですか。女と知れないほうが、彼らにも都合がいいはずです」

「いつあなたを知っている人に出会わないとも限りません」

「そういう時は演技で乗り切ります。ポーカーフェイスは得意ですから」

ウィリアムはため息をついた。

「家出ですか？」

ライリスもひとつ息をついて、空を見上げた。

「ぼくの事情は聞き及んでいるでしょう。誰も心配する人なんていませんよ」

「レアフィリスさま」

愛称ではなく本名を呼ばれ、ライリスは笑みを顔から消した。

「その名で呼ばないでくれない？」

冷たく凍るようなその声に、ウィリアムは一瞬固まった。

「ご自分の名がお嫌いですか」

「嫌いですよ。その名はぼくを縛る鎖でしかない」

「ライリス、というのだって愛称でしかないではないですか」

「かまわない。少なくとも、本名をくださいというところが気に入っていますから」

背後の気配で、ウィリアムが渋面になったのを感じた。不機嫌そうだ。

「……こんなところまで来るなんて、逃げ過ぎではないですか？」

「いけませんか？」

ウィリアムの顔が歪んだ。

「悪いことは言いません、帰った方がいいですよ」

「ご親切にありがとうございます。でもぼくは、それくらいならもっと遠くへ逃げます」

さらりと返されて、ウィリアムは小さく溜息をついた。

「でしたら、是非ご教授願いたいですね、逃げるコツを」

「ぼくがあなたの立場だったら、そりゃあ逃げられないでしょうよ、さすがに」

「そうでしょうか。ここにいる時点で相当その能力はあると思いますが。……噂で、なんでもこなす天才だと聞いていますよ、あなたのこと」

「へえ、珍しい。そういう評価もされているんですね、ぼく。てっきり死ねばいいと思われているのかと」

「……ライリス様」

「お教えしますが、ぼくは逃げているけれど、逃げ切れたことなんてないんですよ」

ライリスは歪んだ笑みを漏らした。目の前の花は、愛らしいピンク色。清楚で透明感のある、小さく可憐な花だが、ライリスはこの花の根が強力な眠り薬になることを知っていた。

どんなものにだって、必ず裏がある。逃げ続ける事が出来るのは、逃げ切る事がないからだ。逃げ切れたらもう逃げる必要なんてないのだから。

「逃げ切る方法を知りたいのは、ぼくのほうだよ」

ウィリアムは返事をしなかった。

「聖者さん。以後ぼくを呼ぶときはライリスと。家でもないのに、本名で呼ばれるのは我慢がなりません。ぼくは今、レアフィリスではないんです」

レアフィリス、と言った彼女の頬が、その時だけ強張った。

「……今は、ライリス・ハイヴンですから」

第9話 呪い

「オレ!？」

アーウィン は目を丸くした。

「よりによってオレ? オレが聖者様と二人きりでお話してわけ?」

「二人きりとは言っていないでしょう」

オーリエイトは淡々と言った。

「私がついていくわよ」

「でも、なんでオレなの?」

「いいから、何も言わないでついてきて」

アーウィンはしぶしぶ従った。

アーウィンが連れていかれた部屋は、皆が割り当てられた部屋と、そう変わりなかった。ただ、壁には天井に届くほどの本棚がずらりと並んでいて、部屋の中央には高級そうな、上品な机が置いてある。先ほど知り合ったばかりの青年は、その机からは離れて、窓辺に立つて外を眺めていた。

「ウィリアム」

オーリエイトが呼び掛けると、彼はようやくこちらを向いた。オーリエイトからアーウィンに目を移し、少し眉をひそめる。

「例の件ですね」

オーリエイトは頷いた。

「正直にいうとあまり気乗りはしませんが……もしそうだった場合、あなたは彼を巻き込むのでしょうか? これ以上犠牲者を増やすつもりですか」

「全員が協力しなきゃいけないって、あなたにも分かるでしょう」
アーウィンは我慢ならなくなった。

「なあ、頼むから二人だけで分かった顔になつてないで、説明してくれよ！ よつぼどの頼みごとじゃない限り聞くけどさ、何も分かんないんじゃない協力しようがないだろ」

オーリエイトとウイリアムは顔を見合わせた。

「まずは、確かめないと何も言えないわ」

「だから、何を？」

「アーウィン、ここで火を出して。あなたが出し得る一番強い火で」「はあー？」

アーウィンは呆れた声を出した。

「この家だけじゃなくて山全体が火事になるぜ」

「私が止めますから、心配いりません」

ウイリアムが静かにいった。アーウィンはむっとした顔をする。

「言つとくけどっ、オレ、今まで本気出して魔法使ったことないかな！？ 自分で言うのもなんだけど、オレつてとんでもなく魔力は強いと思う。止められなかったらどうすんだよ」

「甘く見ないでください。私は聖者です」

ウイリアムは微笑んだ。余裕なまでの笑顔に、アーウィンはやれやれと首を振って、右手を掲げた。

「我に従え、火の元素に属するものよ！」

炎がほとばしる。遠慮なくやるぞ、と思つてアーウィンは集中した。

もつと。もつと強く！ すると、ウイリアムがアーウィンに向かって手のひらを向けた。突然、押さえられた感じがした。

アーウィンは驚いて目を見開いた。魔力の出口を塞がれて、力がうまく出ない感じがした。みるみるうちに炎が萎んで、わずかにちらちら燃える程度になった。アーウィンは呆然とウイリアムを見つめた。

「す、すげえや……」

感心を通り越して、呆ける。何の力だろう、これは。聞いた事がない。

「間違いないです」

ウィリアムは言って、手をおろした。突然魔力の出口を塞ぐものがなくなつて、アーウィンは山火事になつては大変、と慌てて炎を引つ込める。

「彼ですね。直接私が管理できるのは、『ガーディアン守護者』達だけですから」

「がーでいあん?」

アーウィンはきよんとする。

「なんだそりゃ」

それは無視して、オーリエイトは言った。

「アーウィン、少しウィルと話をしたいの。もう帰っていいわ」

「帰っていいって言うより、帰れって感じの言い方じゃん」

ぶつぶつ言いながらもアーウィンは部屋を出ていった。

ばたんと音がして戸が閉まると、ウィリアムが先に言った。

「……あと一人になりましたね」

「ええ」

オーリエイトは感動のない声で言った。

「全員揃つたら、どうする気です?」

「あなたはどうしたいの、聖者さん」

その言い方に、ウィリアムは顔をしかめる。

「あまり聖者聖者と言わないでくださいよ。せつかくクローゼラから逃げてきたんですから」

「……逃れられるものじゃないわ」

「わかつてますよ」

ウィリアムは溜め息をついた。

「全員揃つたら……そうですね、せめて全員で教会の束縛から自由になりたいです」

「あら、なつてもらわないと困るんだけど」

その言葉に、ウィリアムは微笑んだ。

「……あの子のことはどうするんです? 急に『あなたが守護者の

「一人だ」と言ったところで、ついてきてくれるとは思えないのですが」

「取り敢えず、エルトの所に連れていくわ」

「エリオットの？」

ウィリアムは首を傾げた。

「あら、聞いてないの？ クローゼラから帰城命令が出てるのよ、ウィリアムは目を丸くした。

「あの人は……今度は何を考えて……」

「ノアに関係あると思うの」

意外なオリエイトの答えに、ウィリアムはえつと漏らした。

「レインからいろいろ話を聞いたわ。最近、よくエルトにノアのことを聞いてるらしいの」

ウィリアムは頬に手を添えて考える格好になった。

「確かに……彼は最近よくクローゼラの所に入入りさせられている、と愚痴をこぼしてました」

「とにかく、アーウィン君は旅に連れていくわ。その道々で、聖者のこともガーディアンのことも少しずつ教えてく」

「それから、彼の判断に任せるんですね」

オリエイトは頷いた。

「それで、アーウィン君を見てもらうほかに、私に何か用はありますか？」

オリエイトは金色の瞳をウィリアムに向けた。

「あと二人、見てほしい人がいるの」

ウィリアムは少し身じろぎした。

「二人？ ノア君の他にも誰かいるんですか？」

オリエイトは頷いた。

「ノア・グレイフィールドとリオ・ラッセン……あの銀の髪の女の子よ」

「おい、リオ、リディア、ノア」

談笑していたリオとリディアの二人は顔を上げた。アーウィンが奥の部屋に向かってあごをしゃくっていた。

「お呼びだぜ」

リオは呼ばれるだろうなと思っていたので、さほど驚かなかった。なんせリオを襲ってきたのはウィリアムの知り合いなのだから。

なぜリディアとノアが一緒なのかは首を傾げたが、とりあえず何も聞かないで言われるままに指定された部屋に入った。

「こんにちは」

部屋にいたウィリアムはそう言ってお辞儀をした。リオとリディアも会釈を返した。

「オーリエイトから話は聞きました。ノア君は話せないそうですね？」

はい、とリディアは答えた。不安そうな顔をしている。オーリエイトは部屋の隅で、何も言わずに黙って見守っていた。

「ノア君、こつちに来てくれませんか」

ノアはウィリアムを見つめ、リディアを見上げ、少し首を傾げた後、リディアの手を引いてウィリアムのほうに歩きだした。

「すみません、この子、私がないと不安がるの」

リディアが申し訳なさそうに言った。ウィリアムは屈んで、ノアと視線の高さを合わせる。

「かまいませんよ。少し魔法をかけますから、付き添ってあげてください」

「魔法を……？」

リディアの顔に占める不安の割合が増した。

「単純な声帯の問題なら、私がすぐに治せます」

ウィリアムはそう言って、許可を求めるようにリディアを見上げた。

「少し喉が痛みますが、一時的なものですよ」

「でも……複雑な魔法ですよ？ 先天性な病気を治す場合、治療魔法はかなり難しいと聞いているんですけど」

ウィリアムは笑った。

「大丈夫です。聖者にとつて、複雑な魔法はありませんから」

傲慢にもとれる発言だが、ウィリアムの言い方は丁寧な口調と同じように、謙遜するような感じが含まれているので嫌味にならなかった。

「私はイメージで魔法をかけられますから、失敗はしませんよ」

普通の魔法使いは、呪文が魔法に不可欠となる。イメージだけで魔法をかけるなんて神業だ。聖者の魔力とはそれほど強いものなのか、とリオは驚いた。

リディアは少し考えていたが、ノアを見て頷いた。ウィリアムは手のひらをノアの喉にあてる。ぽうつと魔法特有の光が出て、ノアが顔をしかめた。それでも物分かり良くおとなしくしている。少ししてウィリアムは手を離れた。

「では、ノア君、声を出してみてくださいませんか」

ノアはかぱつと口を開けたが、その喉から音は出なかった。見守っていたリオとリディアは肩を落としたが、ウィリアムはやっぱり、という顔をした。

「呪いです」

予想しなかった言葉に、リディアはえつと言って目を見開いた。

「ノア君には呪いがかけられています。それが彼の声を奪っているんです」

「嘘っ……」

リオも驚いて呟いた。

「大丈夫です、声を封じているだけで、害のある呪いではありませんから」

それでもリディアは心配でたまらないという顔をした。

「その呪い、解けるんですか？」
ウィリアムは難しい顔をした。

「どうでしょう。呪いの正体はつきりすれば何とかできるでしょうが、私には……」

リディアはそれを聞いて肩を落とした。ウィリアムが聞く。

「ノア君は今幾つですか」

「八歳です」

リオが思っていたより上だった。

「では、そろそろ字を教えてあげてください。意思表示ができないのは苦痛な事ですから」

何をいうのかと思えば、魔法を自在に操る聖者らしからぬ、現実的な意見だったので、リディアはぼかんとした。

ウィリアムはノアの目を覗き込む。

「あなた達姉弟は天使の子ですよね」

「え……はい」

ウィリアムは溜め息をついた。

「……オーリエイト。あなたは……」

そこまで言っつて、ウィリアムは言うのをやめた。なぜ急にオーリエイトの名が出たのかと、リオとリディアはわけが分からなかった。「天使の子は大抵何かの力を受け継ぎます。ノア君も何らかの天使の能力を継いでいるでしょう。癒しの力か、白魔術属性の生き物を従わせる力とか……いずれにせよ、その能力を遺憾なく発揮するには呪文が欠かせません。話せないなら、せめて字を覚えて呪符しゅふを使わないと」

ああ、とリオとリディアは納得した。だから「字を教える」というわけか。リオは彼の知識量の膨大さに閉口した。天使の能力なんかを知っている人など、滅多にいない。さすが聖者、すごく教養がある。

ウィリアムは立ち上がった。その動作にも品があった。

「ノア君のことは、以後も調査していきましょう。ところで……リオさん」

リオは突然名を呼ばれて、慌てて「は、はい」と返事をした。

「クローゼラという人に、追われているそうですね？」

慎重な言い方だった。少し声を押し殺した感じで、いかにも口にしてはいけない名のような。

「はい」

リオは何を聞かれるんだろうと思ひ、少し上目遣いになった。

「本当に、心当たりは無いのですか」

「はあ、狙った村の唯一の生き残りであること以外は」

ウィリアムはじつと、見極めるようにリオを見つめた。青と金の視線が痛い。真っ直ぐなその視線に、リオはなんとなく鼓動が速くなる気がした。

「すみませんが、少し体に触ってもいいでしょうか」

「え、あ、はい……」

ウィリアムはそつとリオの肩に触れた。触れて、少し驚いたように手を離す。

「あの、何か……」

不安になったリオが聞くと、ウィリアムは首をかしげた。

「あなたにも呪いがかけられていますね。それも、結構強力です」

えっ、とリオは目を見開いた。そんなの初耳だ。身に覚えも無い。とりあえずは、毎回あの追っ手の魔法使いの魔の手からは、逃げてきていたのに。いったいいつ、呪いをかけられるような機会があったのだろうか。

「強力な魔法は時として、その効力を持続させるために、周りの魔法を吸い取ります。あなたに触った時、私も少し取られました」

リオはびっくりして、半歩下がって慌てて言った。

「あ、す、すみません、そんなこと知らなかったもので……」

ウィリアムは少しだけ笑った。

「あ、いいえ。取られることは構わないんです。別に全ての魔力を奪われるわけではないですから。この呪いもあなたに害を与えるものではありませんが、やはり、あなたの特別な何かを隠蔽している気がしますね」

特別な。何なんだろう。あたしは本当に何の変哲もない、普通の女の子でしかないのに。

「これだけは確かなんですよ、あの……」

ウィリアムは顔をしかめて、目を逸らした。

「あのクローゼラが、悪魔まで使って、ただの女の子を追うはずが無いんですから」

でも、トリオはウィリアムを見上げた。

こんなの初めてだ。こんなにも、自分が何かに巻き込まれていく。自分に、何か秘密が。自分自身さえ知らない秘密が、何かを巻き込みながら露見されていくのは。

第10話 花園で

リオは庭にいた。混乱していて、リディアもオーリエイトも連れずに一人で庭にいた。庭は広くて、噴水も東屋あずまやもあった。その東屋に座って、リオは両手の中に顔をうずめていた。

「何なの……」

わからなくなっていく。

「あたし、何者なの……」

本当に、普通の十三歳の少女でしかなかった。突然、愛していた故郷を襲われ、一人で放浪し、大陸の中央付近までやってきて。

呪い。全てがそれに繋がっている気がする。呪いがそもそも発端で、呪いがかけてられているから追いかけて。そういうことなら筋が通る。けれど、どうしても呪いにかけているからといって追われなければならないのだろうか。

考え詰めて、それでも答えは出なくて、あまり喉を通らない夕飯を食べた後、またこうして外に出てきた。

「よお」

声をかけられて振り向くと、そこにはアーウィンがいた。

「リオも考え事？」

リオは首を傾げた。アーウィンらしくない。お気楽で元気いっぱいな悪戯っ子という感じだったのに、今は何か物思いにふけっている様子だった。リオのいぶかしげな表情を見て取ったのか、アーウィンは肩をすくめた。

「なんかさあ、オレの人生、一変しそうな予感なんだよな」

アーウィンはそう言って、なんの断りもなしにリオの隣に座った。

「あたしも……なんか全部変わっちゃいそう」

しばし、沈黙が訪れた。噴水から流れる水の音だけが響く。

「今までのお気楽人生ともおさらばかなあ……」

アーウィンは言つて、空を見上げた。墨を流したような空に、銀の粉を撒いたように星が光っている。

「オレ、ガーディアンとかいう人種らしいんだ」

何の脈絡もなしにそう言われて、リオは目をぱちくりさせた。

「ガーディアン？ 守護者？」

「たぶん。はつきりとは言われなかったけどさ、聖者がそんなようなことを言つてた」

「それって、教会の重役の役職名だよな？」

「知るか。オーリイとウィルだけで分かったような顔しちゃつてさ」
アーウィンはふて腐れたように頬を膨らませる。リオはそれに苦笑した。知り合ったばかりの少女と聖者を、早速愛称で呼ぶなんて彼らしい。

「リオも呼ばれたんだ？ 何、君も守護者？」

「ううん、とリオは首を横に振つた。」

「そんなわけないよ。守護者は魔力の強い人じゃないとなれないんだから。……あたしもそんなに詳しいわけじゃないし、守護者といつても何を守つてるのかとかは知らないけど」

リオは少し迷つたが、彼になら話しても大丈夫だろうと思つて口を開いた。

「あたしには何か呪いがかけられてるんだつて」

「呪い？」

アーウィンはびつくりしたように目をぱちぱち瞬いた。

「何だよ、皆わけありかよ」

リオは肩をすくめる。

「そうみたい。ライリスも只者じゃなさそうだし」

探りを入れるつもりで言ったのに、アーウィンは伸びをして「そいかあ？」と言っただけだった。

「確かに普通じゃないところあるけどさ。あいつ、超人だよ。天才なんだ」

「天才？」

これは、納得できるようで意外な話だった。

「何でもすぐに習得しちゃうんだよ。努力しなくても何でもできるんだ。めっちゃくちゃ頭いいんだぜ」

へえ、とリオは呟いた。

「ねえ、あなた達って、どうやって知り合ったの？」

「なに？ オレとライリス？ 狩りをしてたら偶然会ったんだ。オレの方から一緒に組もうって誘って、ライリスもOKした。それだけ」

何ともあっさりした出会いだ。

「リオは？ どうやってオーリイ達と出会ったの？」

リオは言うのを少し躊躇ちゆうちゆうした。

「……行き倒れになったのを助けてもらったの」
それだけ言った。

「へえ。よく分かんないけど、大変だったんだ」

深く追及しようとしないので、リオはほっとした。

「それにしても、オーリイって何者なんだろ。聖者なんかと二人つきりで会議するなんてさ。聖者と相談しあうようなお偉いさんには見えなかったけど」

リオは黙っていた。とにかく、皆只者ではないというだけだ。

「アーウィン」

柔らかな声がした。ウィリアムが東屋に向かって歩いてくるところだった。

「あ、ウィル」

アーウィンが呼び掛ける。愛称で呼ばれて、ウィリアムは一瞬驚いたような表情をした。しかし、すぐに照れたように笑う。

「ライリスが呼んでいましたよ」

「おう。ありがと！」

アーウィンは陽気に返事して立ち上がった。

「んじゃ、またね、リオ」

ヒラヒラと手を振ったかと思うと、東屋あずまやの柵を軽々と飛び越えて走り去っていった。ウィリアムはしげしげとその後ろ姿を眺めて言った。

「身軽ですねえ」

リオはそれには返事をせず、彼から目を逸らす。ウィリアムはそれに気付いて、少し笑みを引っ込めた。

「お悩みですか」

リオは尚も答えない。

「仕方無かつたんですよ」

ウィリアムは静かに言った。弁解というより、単に事実を告げているような口調だった。

「本当は、ああやって呼び出さなくてもよかつたんです。気付かないように調べることでできてきました。でも、結果をあなたに教えずにオーリエイトにだけ教えたら、彼女は絶対にあなたには教えません」

リオは顔をあげた。色違いの視線が自分に注がれていた。

「それとも、知りたくなかつたですか？ でしたら謝ります」

ううん、とリオは首を横に振った。

「いいの。あたし、ただどうしたら良いのか分からなくなって」

ウィリアムは少し笑って、リオの隣を指差した。

「座つても？」

「いいよ」

ウィリアムは上品な動きでリオの隣に座った。音も立たないくらい静かな動きだった。

「安心してください。必ず呪いの正体は突き止めます」

「なぜ？ あなたのことにゃないのに」

「私のことでもあるんですよ。今は言えませんが」

この人、秘密だらけじゃないの。その割には得体の知れなさを感ぜさせないところが、オーリエイトとの違いではあるが。

ウィリアムはそれきり黙った。リオも何も言わず、ただ庭園を眺めていた。

夜になると一層神秘的な庭だ。ぼんやりと霞んだ薄明かりが、幻想的な雰囲気を実際立たせている。暗い中で、昼間の色とりどりの花たちはすっかり鮮やかさを失っていたが、その淡い色がまたこの上なく神秘的だった。芳香は東屋の側の月下美人から漂ってくる。昨日、屋敷内を探検したときに、リディアが月下美人は美容薬に使われるのだと教えてくれた。噴水の音はあくまでも優しく、飛び散った飛沫しぶきが花や葉に乗っているとなおのこと美しい。

「……綺麗な庭だね」

リオは思わず呟いた。

「ほんと、綺麗。いいな、こんなに広くて綺麗な庭を持つてて」

ウィリアムはちらりとリオを見た。

「……広い、ですか」

「広いよ。こんな庭が欲しいなって、思った」

ウィリアムは少し笑った。今までの優しい笑みと違い、嘲笑のようだった。

「広いですか。あなたにとってはそうなんですな」

意味をはかりかねて、リオは困惑して視線を泳がせた。気に障ったのだろうか。

「広く見えるだけです」

言ったウィリアムの表情に、もう笑みはなかった。

「広く見せかけて、狭いのを隠そうとしているだけです。実際はただの檻ですよ。あなた達には抜け出せても、私だけには抜け出せない」

リオは驚いて口を開けた。どうしたんだ、急に。

「あの、ウィリアムさん？」

「ウィルでいいです」

ウィリアムはぼつんと言った。

「せめて今だけは、皆さんに敬語を使われる身分だと言うことを、忘れさせてください」

切実なものが含まれていて、リオは焦った。

「わかったよ、ウィル。どうしたの？ 辛いの？ 逃げたいの？」

ウィリアムは顔を上げてリオを見つめた。いろいろな想いがよぎるその目は、聖者の証のオッド・アイ。ウィリアムは迷うように口をあけた。

「私よりも、教会に入る気はなかったんです。ただ……」

すべての感情を抑えようと努力したらしいが、その声は震えていた。ただ、といったあとはどうしても続けられなかつたらしく、それきりウィルは黙ってしまった。リオはそれを見えますます驚いてウィリアムを見つめた。

皆わけありだ。でも、この人が一番、たくさんものを背負っている気がした。少しでも下ろしてあげないといけない。

「ただ？」

「いいえ、なんでもないんです」

「あなた、囚われの身なの？」

今までの話からそう推測して、おずおずと聞くと、ウィルは少し目を見開いて、穴が開くほどリオを見つめた。見つめられたリオの頬が、自然と熱を持ち始める。

「あ、あの……？」

声をかけると、ウィルは目を逸らした。

「すみません。変な話をして」

ウィルはおもむろに立ち上がると、足早に立ち去ろうとした。リオは思わずその袖をつかんで引き止めた。

「ねえ、待って。聖者って聖なる者でしょ？ 守られるべき存在のあなたが、どうしてそんなに悲しそうな目をするの？」

「……放してください」

「質問に答えて」

「放してください！」

もうその声は、感情を抑えていなかった。ただがむしゃらに逃げようなその抵抗が、あまりに痛々しい。なんだか手を離れたとたんに、ひびが入って崩れてしまうのではないかと思うくらいだった。どうして、どうして、どうして。無限の理不尽が彼の中で軋^きみをあげている。リオには、どうしてだかそれを感じ取ることができた。リオは彼の袖をつかむ手に力を入れた。

「……………話してよ、ウイル」

「……………」

「ウイル？」

「……………これ以上は、巻き込めませんから。ひとつだけ教えてあげられるのは、教会には近づくなということだけです」

リオは彼がようやく口を聞いた機会を、すかさずつかんだ。

「なぜ？ 教会は人々を守るためのものでしょ？」

「……………表向きは、です」

「それじゃ、あなたは、その裏の教会の犠牲者なのね」

ウイルは何も言わなかった。手で触れられそうな程に、孤独と恐怖と哀しみを発している。リオは痛いほどにそれを感じた。故郷を失くし、愛するものを亡くした自分の痛みと共鳴するものを感じた。

「ねえ、ウイル」

「……………はい」

「あなた、たくさん我慢してきたのね。たくさん諦めてきたのね」

「……………」

ウィリアムは答えなかった。月下美人の香りが、鼻腔を心地好くくすぐっている。

「そのままだと壊れちゃうよ。ねえ、あたしでよければ、あなたにひびを入れてるもの、あたしにも分けて。あたしはもう部外者じゃないの。あなたのお世話にならなきゃいけない。あたしの呪いが解けたら、絶対にあなたの事もたくさん知って、あなたのことも解決する。だから、その気になったら何でも教えてよ」

ウイルが震えた。聖者と崇められる青年は、大きすぎる闇を纏^{まと}っ

ている。ウィルは隠すように目をとじて顔をそむけたが、まぶたの間から涙が流れた。リオは彼の手を取る。

「泣かないで。あたしがいるから、あたしが傍にいてあげるから。ねえ、泣かないで」

はい、とウィリアムは消えそうな声で呟いた。

庭園は、やはり美しかった。

第11話 リオの推理

リオたちはその後、数日間ウィリアムの館で過ごした。

あの夜のウィリアムの言動は、リオにとっては少なからぬ衝撃で、その後リオは、気がつくと自分のことではなくウィリアムのことを考えていた。何が彼を縛っているのだろう。自分を狙うクローゼラと、彼はどんな関係なのだろう。

あんなに自分のことで悩んでいたのに、他人のことで悩むなんて、もしかしたら自分は、かなりのお人好しなのではないかとリオは思った。

花園での一件のあと、ウィリアムはリオの姿を捉えるたびに気恥ずかしく笑っていたが、少なくともあれで出したいものは全部出したらしく、前より澆刺として見えた。まあ、元気になってくれたなら、自分のことを放り出して悩んだかいはあったかな、とリオは思った。

みんなそれぞれに自分の問題を抱えてしまったらしく、廊下を歩けば考え事をしていて誰かに出会う。リディアが一番悩んでいるようで、ノアが心配してずっとリディアを見上げていたくらいだ。その悩みの種が自分であることを、ノアはあまり自覚していないようだったが。

その後のアーウィンの報告で、オーリエイトがはつきりと、アーウィンは守護者だと言ったことがわかった。

「でも、肝心のその守護者が何なのかを詳しく説明してくれないんだよな」

アーウィンは不満そうにそう漏らした。

ライリスはというと、唯一この滞在で、ほとんど何の悩みも持っていないようだった。普通に花園を探検しては綺麗な花を持ち帰ってプレゼントしてくれ、（こういうところがまた男の子っぽいなと思う）庭の木によじ登って、珍しい果物を取って戻ってみんなに振舞ったりした。ウィリアムはライリスにだけ微妙な反応を見せた。ライリスは何事もないように、ちよつと身分がお高い相手に対するようにウィリアムに接していたが、ウィリアムはそれに恐縮しているようで、他の者より明らかに、ライリスに対して少々敬意を払っていた。

リオは全員の観察に努めた。特にオーリエイトとウィリアムには気を配った。直接聞いても答えが得られなそうなので、二人の行動から自分なりに推理するしかなかったのである。結果、わかったことは、二人とも自分の呪いの正体を知らないということ、ただクローゼラとやらが自分を狙っていることから、二人が自分をとても特別視していることだった。

今までの会話からだけでも、クローゼラとやらが只人ではないということもわかった。ウィリアムよりも上の人のような人だった。ウィリアムはその人から今離れているのが、とても嬉しいらしい。誰なんだろう、と思う。聖者より上の者など、ごくごく限られている。王族か、あるいは教会の最高権力者の「女神」か。

リオがいた教会は地方過ぎて、中央からの統制は届いていなかった。そのせいで、リオは教会の上の方がどうなっているかは知らない。それでも、母が亡くなった後にずっと世話をしてくれていた神父が、世間には知られていない、「女神」と呼ばれる裏の最高権力者がいるということを教えてくれたことがあったのだ。せいぜい今の状況に役立つ情報はそれくらいだった。

「女神って、本当にいるの？」

オーリエイトよりは簡単に質問に答えてくれそうなウィリアムに聞くと、彼は至極複雑で驚いた表情になった。

「女神を、知ってるんですか？」

「いるってことだね」

リオが言うと、ウィリアムは黙って床を見つめた。

「……います。いることはいますが、なぜ急に？」

「あなたが怖がりそうな相手を探っているの」

単刀直入に言うと、ウィリアムは驚いた。

「リオ……あなたは……」

「あたし、わけもわからずに追いかけられて、殺されるのは嫌なの。せめて、理由を知りたい」

「……ですから、それは私が」

「あなたとオーリエイトのいうことから考えるとね、親玉はあなたより偉いのよ」

ウィリアムは困惑を隠しきれずに、視線をさまよわせた。

「それで、そのクローゼラとやらの正体の選択肢を絞ったわけ。1、王様。ううん、クローゼラって女名だから女王様。2、ほかの王族。3、女神。さあ、どれ？」

きっぱり言い切ると、ウィリアムは黙り込んだ。

「ってことは、この中に正解があるんだね」

リオが言うと、ウィリアムははっとしたように顔を上げた。

「……あなたって人は」

「あたしは黙って他人に負けさせたりなんかしないよ。これはあたしの負うものだよ」

真顔で言った、まだ幼さの残る少女に、ウィリアムは閉口した。

「あたし、絶対許さないから。大切な故郷を奪って、あたしの生活を奪って、助けてくれた人にまで迷惑をかけて、あたしの何もかもを滅茶苦茶にして、あなたにそんなにつらい思いをさせてるそのク

ローゼラってやつを。自分が無力なことぐらい知ってるけど、それでも情報収集くらいは、あたしにだって出来るわ」

「言っておきますが、生易しい相手ではありませんよ。私が逆らえないような相手なのですから」

「でも、あたしを殺したいくらいに邪魔だっと思うなら、そう思わせる何かがあたしにはあるってことでしょ？　じゃあ、あたしが持つてるその何かをつきとめれば、そのクローゼラって人に勝てるってことじゃない？」

ウィリアムは黙ってリオを見つめていた。

「ねえウィル、いつまでも秘密主義はやめてよ。あたし、知りたい。何で教えてくれないのか分からないけど、あたしい、知ったことで起こる事に対する責任ぐらい、負えるわ。あたし、もう巻き込まれてるし、巻き込んでる。お互いのためにならないじゃない」

ウィリアムは迷うように目を泳がせた。そして、何か言おうとして口をあけた。

「ウィル」

静かな声が出た。オーリエイトだった。本当にたまたま通りかかったようで、リオを見つけて不思議そうに首をかしげている。

「どうしたの？　もうすぐ礼拝の時間じゃない？　リオ、真剣そうな顔だけど何か？」

「なんでもないんです、オーリエイト」

ウィルはさつと笑顔を被ってそう言った。この人、意外にポーカ―フェイスがうまい、とリオは思った。何でも感情が顔に出そうな顔をしているくせに。穏やかな人だと思っていたけれど、意外と油断がならないかもしれない。

「この屋敷についていろいろ教えていたんですよ。花園が気に入ったみたいなので」

花園が気に入ったのは事実だが、さらっと嘘に変えられるところがすごい。

「……そう。あとで資料庫を貸してもらえない？」

「資料庫、ですか……」

ウィリアムは難しい顔をした。

「変な呪符が埋めてあるかもしれないですよ。クローゼラ様に、部外者を入れたことが知れてしまいかもしれません」

オーリエイトはそれを聞いて、一瞬迷うような顔をした。

「かまわないわ」

「ですが」

「この書庫だけ入ったことないのよ。それくらいの危険を冒しても入りたいわ」

「そうですね……」

ウィリアムはなお心配そうな顔をしながら、ポケットから一枚の呪符を取り出した。

「これが鍵を開ける呪符です。呪文は符に書いてあるとおりです」

「ありがとう」

オーリエイトはそういうと、リオをチラッと見て「来る？」と聞いた。リオは少し驚いた。

「え……資料庫に一緒に？」

オーリエイトは頷く。

「いいの？ あたし、一応部外者だよ」

オーリエイトは首を傾げた。

「あなたも調べたいことがあるんじゃないの？」

凶星だったので、リオは素直に頷いた。

「いく。いきたい」

ウィリアムはさらに心配そうな表情になった。

「気を付けてくださいね。あの人がどこまで、あなたのやろうとしていることを知っているのか、わかりませんから」

オーリエイトは「わかってるわ」というような視線をウィリアムに送り、ぱっと背を向けて歩き出した。

「オーリエイト」

「なに」

「オーリエイトは、女神がいるってこと、知ってるの？」

単刀直入な質問に、オーリエイトは一瞬足を止めて、リオを振り返った。

「……ウィルに聞いたの？」

「じゃ、知ってるんだね」

一瞬、二人の間の空気が張り詰めた。オーリエイトはリオに視線を向けずに、ぽつりと言った。

「知ってるも何も、旧知の仲よ」

リオは必死にオーリエイトの表情を探った。今、彼女が与えてくれたのは、きつと大きなヒントだ。だが、どうして与えてくれた？

「じゃあ、友達？ それともライバル？」

「……ライバル、のほうに近いわね」

その口調からは何も読めない。

「あなたは、どうして？」

オーリエイトが唐突に聞いた。リオはその質問の主旨がわからず、首を傾げる。頼むから、主語だけは省かないでほしい。

「どうして、そんなに私たちのことを知りたがるの？ あなたは自分のことだけ出なくて、私たちの事も探ろうとしているわね」

リオが答えないので、オーリエイトはやっと主語を足した。リオはそういう意味か、と思って、言葉を探す。

「自分でもわからないよ」

正直な言葉だった。オーリエイトは少し意外そうに、リオを見つめる。

「自分のためっていうのもあるよ。狙われる理由がわかれば、どうしたら自分を守ることができるか、わかるかもしれない。もし、あげてもいいものを狙われてるならさっさとあげるし、捨てられるなら、見つからないようなところに捨てる」

「でも、それだけのようには見えないわ」

「うん」

リオは分かっている、と言うように頷いた。

「みんながあんまり訳有りすぎるんだもん。あたし一人のことなんて比べ物にならないくらい、たくさんのが絡んでる気がするの。その一部に、あたしは巻き込まれてる。だったら全体像を引き出したいの」

オーリエイトは何も言わなかった。金の瞳に、さまざまな思いが過ぎっている。

「……あなた、私の昔の友人に似ているわ」

ぽつりと、そう言った。

「いろいろなことによく気がついて、鋭くて、妙に真っ直ぐで人の好い子がいたの」

「は……あ……」

金の瞳はリオの予想外に優しくなっていて、リオは少し驚いた。

「安心して。私はあなたを除け者にするつもりはないわ」

「え……」

「それが心配だったんでしょ？」

オーリエイトは微笑む。身内にしか見せない、情愛のこもった優しい微笑だった。リオは少し照れて俯いた。こういう目を向けられるのはくすぐつたい。

「ごめんね、リオ。あなたを巻き込むわ」

リオは首を横に振った。

「いいの。あたしも巻き込むんだから」

「……あなたも？」

「あたし、自分の事情にあなたたちを巻き込んだでしょ？」

オーリエイトは少し目を瞬いた後、少し笑った。

「……そうね」

それから急に表情を引き締めて、リオの目の前に魔法の杖を突きつけた。急激な変化に、リオは驚いてびくつと体を震わせる。

「ただしね、急にいろいろすることは教えられないわ。あなたはまだ

私たちと知り合って日が浅過ぎる。アーウィンと一緒に、少しずつ事情を教えていくわ」

「アーウィンと……」

リオは反芻した。もしかして本当に自分もガーディアンなのかしら、と思う。

「あの子は守護者の一人なの。だから、グラティアに連れて帰るわ」「グラティア？」

「私の……私やリディアやノアが住んでいるところよ」「それってもしかして……」

リオは目を見開いた。

「聖地グラティア？」

今度はオーリエイトが少し目を見開いた。

「……詳しいのね」

「だってほら、あたし、教会に住んでたから」

「……そうだったわね」

言って、彼女はくるりと背を向けた。この話題はこれで終わり、とその背中が語っていた。

「いきましょ。資料庫、勝手に好きな本を見ていいから」

リオはオーリエイトの深紅の髪を追いかけた。そして、今日得た情報を頭の中で整理していた。

第12話 リリス

資料庫はリオが想像したより大きかった。元から本が好きなりオは、オーリエイトが鍵を開けるなり、彼女よりも先に資料庫に入った。木製の本棚と本特有の匂いが混じって、リオは何とも言えない落ち着いた気持ちになった。

「図書館みたい」

リオは、本を収納するためだけに造られた建物の中で、こんなに大きなものは初めてだった。

「気に入った？」

「うん、すごいよ」

リオは手近にあつた本を手にとり取って見てみた。リオには縁のない奇妙な魔法文字が連なっている。頭が痛くなつてもとの場所に戻し、隣の棚に映った。これは読める文字だ。

「降魔戦争の歴史」、「上級の天使と悪魔一覧」、「悪魔氾濫の歴史」……悪魔関連の本が多い。棚にかかっている表札を読むと、ウィリアム個人の本だった。

「……ウィルは、悪魔のことを調べてるんだ」

オーリエイトも悪魔の動向を気にしている。降魔戦争、という単語が気にかかった。千年の昔、髪と人の連合軍と、悪魔の間で起きた戦い。活発化し始めた悪魔たちの動向は何を意味しているのだろうか。

その時、資料庫の奥で、本が雪崩る凄まじい音がした。驚いてリオが駆け付けると、オーリエイトが本の山の中に座り込んで呆然としていた。頭にも一冊、本が乗っている。

「だ、大丈夫？」

リオが聞くと、オーリエイトは頷いた。

「怪我はないから」

そう言って立ち上がるうとしたが、オーリエイトは本につまづいて倒れそうになり、リオが慌てて支えた。やっと本の山から救いだすと、リオはこらえきれなくなつてくすくす笑い始めた。

「オーリエイトでもこんなドジをするんだね」

オーリエイトは頬を赤らめてそっぽを向いた。

彼女が服についた埃を払っている間に、リオは何気なく落ちていく本を一瞥した。突然に、「リリース」という題名が目飛び込んできた。薄っぺらくてノートのような冊子だったが、その題名を見てリオは打たれたようになった。一瞬固まって、その後我に返って弾かれたように素早くその本を懐に入れる。タイミングよく、オーリエイトが「そういえば、役に立ちそうな本はあった？」と聞いてきた。

「うん。ちょっと始めの目的とは違うものになっちゃったけど」

オーリエイトが首を傾げている間に、床に散らばったままの他の本には目もくれず、リオは資料庫を出た。

「よっ、リディア」

アーウィンに声を掛けられ、リディアは振り向いた。

「アーウィン。ちょうどよかったわ、オーリイを見なかった？」

アーウィンは花園の向こう側を指差した。

「さっき、あっちの方でリオと一緒にどこかに行こうとしてるのを見たよ」

「そう……ありがとう」

「あれ、探しに行かないの？」

リディアは微笑んだ。

「リオに用がありそうだから、邪魔しないわ」

ふーん、とアーウインは呟いてリディアを見つめた。

「んね、リオってリディアやオーリィと仲が良くないの？」

質問の意図をはかりかねてリディアがきょとんとしていると、アーウインが付け足した。

「ほら、リオって時々輪に入ってこないじゃん。距離を置いてるって言うか……」

リディアは少し悲しそうに俯いた。

「まだ人と関わるのが怖いんだと思うわ」

「そういや、行き倒れになってたのを拾ったとかなんとか」

リディアは頷いた。

「初めはちつとも口をきいてくれなかったわ」

「へえ。それなら今のリオと比べたらすごい進歩じゃん。君達が助けてあげたおかげなんだな」

リディアは苦笑した。

「救ったとは思ってないわ。人は人と関り合わないと壊れてしまうのに、リオは関わりたくても関われない状況だったの。私たちは、リオを人と人の関わり合いの中に連れ戻しただけ。でも、リオはまだ怖がつてるみたい……どうにか、したいんだけどね」

そっか、と言ってアーウインは足下を見つめた。

「オレと会ったばかりの時のライリスも、そんな感じだった」

「そうなの……？」

「ま、誰にだって辛い過去はあるだろ」

その口調はいつもの気楽な調子に戻っていた。リディアは笑った。

「あら、あなたは？」

「オレ？ オレは珍しい例外」

にっと笑ったアーウインにつられて、リディアも思わず微笑んだ。

リオは早足に自分の部屋に戻った。懐に隠した本が気になってし

ようがなかった。リリス、というのはリオの母の名だった。ある日突然、奇妙な死を遂げた母の。

リオは父のことは一切覚えていないが、母のことはいろいろと覚えていて。優しかった母、誰よりも深い愛情を注いでくれた母。その母はリオが6歳の時に突然姿を消して、一週間経って遠く離れた町で、変死体で見つかった。リオはずっと、それがひっかかっていて。思わずこの本を手を取ってしまったのは、そういうわけなのだ。少なくともこの母の名は、教会の人達も太鼓判を押す珍しい名だった。母自身はあまりこの名が好きではないようだったのをリオは覚えている。緊張の面持ちで、リオは本を開こうと表紙に手をかけた。

その時、ノックもなしにガチャンと音を立ててドアが開いたのでリオは文字通り飛び上がった。見ると、ノアがててと駆けてくる場所だった。

「ノ、ノア」

リオはなるべく不自然に見えないように本、もといノートを閉じてノアの方を向く。

「どうしたの？ リディアは？」

ノアはふるふると首を横に振って、綺麗な色の瞳を困惑に染めてリオを見上げた。

「なに、はぐれちゃったの？」

ノアはこくと頷いた。しゃべれないのに、意外と意思疎通できるものなんだな、と少し感心する。

「おいで」

呼び掛けると、ノアはいつもリディアにそうするように、リオの手にしがみついて、とことこついてきた。……可愛すぎる。もう母親になったような気分で目を細めてリディアを探しながら歩いていると、玄関ホールを出たところでリディアが外から駆け込んできた。

「ノア！！」

長くて真っ直ぐな黒髪を乱して、リディアはノアに抱き付いた。
「よかった！」

リオはその姿を見て苦笑を漏らす。過保護だなあ、ほんと。ノアがお姉ちゃん大好きなら、リディアも弟が何より大切なのだ。

それからようやくリディアはリオに気付いたように、「ありがとう」と言った。

「珍しいね、二人がはぐれるなんて」

リディアは少し赤くなった。

「花園でアーウィンと話し込んでたら、いつの間にかいなくなつて」

「そうなんだ。……珍しいね、ノアが自分からリディアを離れるなんて」

リディアは少し苦笑いした。

「時々、動物を見ると追いかけていってしまうのよ。ノアは動物が大好きだから」

「そうなんだ。……ところで、ノアの呪いの正体は分かったの？」

リディアは急に表情を堅くした。

「……まだ」

「ウィルは何とも？」

リディアは肩を落として頷いた。

「あれから何回か会って、その度にノアをじっと見てたけど、何も言わなかったわ」

そう、とリオも俯く。リディアははっとしたように顔をあげた。

「リオは？ リオの呪いは何なのか、わかった？」

リオは一瞬返事に詰まった。

「今調べてると……」

実を言うと、すっかり忘れていた。

「不思議。ウィルは魔法に関わることなら、なんでも解決していたのに」

リディアはそう呟いて首を傾げた。

「なんでもよ。なのに、なぜノアとあなたのことではこんなに手惑うのかしら」

「猿も木からなんとかってヤツじゃない？」

あまりウィリアムの手腕をこの目で見たことがないリオは、適当に返した。

「ウィルに限って、そんなことありえねえよ」

いつの間に話を聞いていたのか、アーウィンがあくびを噛み殺しながら二人に歩み寄ってきた。

「オレ、あいつの力の凄さ、この身で体験してきたばっか。反則だぜ、呪文も呪符も要らないなんて」

「一体何をしてきたのよ」

リオはその呑気そうな顔に聞いた。

「魔法の訓練。オレ、何かやらされるみたい」

「なんだろーなー、とまるで人事のように言う。リディアは複雑そうな顔になった。

「もし守護者になれと言われたなら、よく考えてから返事をしてね」
アーウィンは「へっ？」と言って目を丸くした。

「私のお兄ちゃんも守護者なのよ。会う度に、教会に入らなければ良かった、って言ってるわ」

初耳だ、と思っけてリオもアーウィンも驚いた。

「たぶん、私とノアがいなかったら、お兄ちゃんは絶対断ってたと思う」

リディアは苦しそうに言っけて目を伏せた。

「教会なんて名ばかりなのよ。ウィルもお兄ちゃんも、縛られてるのよ。囚われるんだわ、教会に携わる全ての人が」

リオはこの天使の血を引く少女が、嫌悪を露わにしたのを初めて目にした。

「オーリイがどんなに心を砕いて擁護してくれても、お兄ちゃんが囚われであることに変わりないわ。アーウィン、よく考えてね」

アーウィンは驚きのあまり、棒を呑んだように立ち尽くしていた

が、すぐに屈託なく笑った。

「オレなら大丈夫だよ。オレが何より大事なのは自由だし。これで人生変わるみたいだし、簡単に決めはしない。ま、オレは独り身で家族もないから、守るべき人もいないからね。責任とかを考えなくて済むから、自由に決めるよ」

リディアはそれでも不安そうな表情をしていた。囚われになるのを知っていて、オーリエイトがアーウィンを守護者に迎えようとしているのだろう、とリオは思い当たった。しばらく姿を潜めていた猜疑心が、またリオの中で頭をもたげた。

何を、彼女はしようとしているのだろう。

第13話 「あなたに」

初めて地獄を見たのは、ちょうど一年ほど前だった。

星が美しかった夜、村の外れで悲鳴がした。パーン、と聞き慣れない爆発音が聞こえて、人口が五十人にも満たない小さな村は騒然となった。

教会の鐘撞き塔から夜の海を眺めていたリオは、異変に最も早く気付いた者の一人だった。咄嗟に鐘を鳴らした。鐘撞きはリオの仕事だった。カラン、ゴーン、カラン、ゴーンという神聖なはずの音は、その夜に限って不気味に響いた。

悲鳴がする。誰かが泣いている。

爆発は数回だけだったが、山と海に挟まれて身を寄せ合うように存在していた集落は、あつと言う間に炎に吞まれた。少しでも村人を避難させようと、リオは駆け回った。

地獄だった。炎は揺らめいては近くのを飲み込んでいく。めらめらという音が耳を焼きそうだった。誰かが泣いているのに、小さな家は崩れ落ちる。火が、人の形に燃えていた。繋がれて逃げよらない犬が、喉も裂けよとばかりにキャンキャン言っている。既に村は全滅していて、断末魔を上げている真っ最中だった。

紅い。紅い。世界が、紅い。

夕暮でもないのに、世界が紅い。夏でもないのに、汗が出るほど暑い。

静かだ。死の静けさだ。

孤独なほどに、身に染みるほどに。
一つ、一つまた燃え散っていく。

必死に駆け回っていたリオの手前、揺らぐ空気の向こう、ふらりと異質な人影が現れた。手には呪符が握られている。立ち尽くす少女に、残酷な笑みを向けて。

こいつが犯人だ、と悟ってリオは恐怖に吞まれそうになって、悲鳴もあげることができずに、がむしゃらに教会に逃げ帰った。

神父様、と呼ぶ。

「神父様！」

紅い。祭壇は真つ二つに折れていて、破壊のあと凄まじく埃が舞っていた。怖くて怖くてどうしようもなかった。もしかしたら、もう生きていないかもしれない。

「神父様、どこなの！？」

「リオ」

呼ばれて、リオは声を聴いた瞬間に安堵泣きそうになった。よかった、生きてるんだ。振り返って抱き付こうとしたリオは、ぞつと足を止めた。

「神父様……？」

「すまないね。もう抱き締めてあげることもできない」

彼はまるで赤いペンキを被ったように血だらけだった。

「け、怪我をしているの？ あたし、薬箱を持ってくる！」

「いいから、リオ、地下道に逃げなさい。隣村の教会に通じてるから。あの男は皆殺しにする気だ」

「神父様も一緒よ！」

神父は笑った。ひどい笑顔だ。足下に、またぼたつと赤が落ちる。

「足を折った」

「あたしが支えになる！ 支えになるから！」

血だらけでも構わない、とリオは神父に抱き付いた。血の臭いが

鼻をつく。けれど、放すほうが怖かった。きっとそのまま消えてしまふ。

「行かないで」

震えが止まらない。

「行かないで……神父様。あたし、神父様が大好きなのに」

リオは言った。愛が呪いだとも知らずに。

神父は一つ溜め息をついて、リオの手をとって、リオに支えられながら地下道まで辿り着いた。神父が鍵を開け、リオの手をとって中に入ったので、リオは少しホツとした。一緒に逃げてくれるんだと思った。

「ね、神父様、あたし達助かるよね」

少しの間の後に返事がきた。

「そうだね」

その答えに安心する間もなく、目の前が光ってリオは倒れた。神父が後頭部を打って気絶させたのだった。

「すまないね、リオ。お前だけは生かしたいんだ」

また、彼の足下に赤が落ちる。

「あいつはこの地下道を知らないだろう……お前だけは、生きななきゃいけない。お前を守らないといけないんだ。そのためなら、私は盾になるよ」

頬を掠めたキスも、「さようなら、可愛い子」という呟きも、戸が閉まって鍵がかけられる音も、リオの意識の外だった。

目を覚ました時には、もう他に選択肢がなかった。神父はリオの手に、彼のつけていた飾り紐を遺していつていた。彼がどうなったのかは明らかだった。激しく泣きながら、リオは隣村まで地下道を進んだ。

村人達は酷いありさまのリオを見て驚いていたが、憐れんで、とてもよくしてくれた。しかし、三日後にはそこも焼き払われたのだ。二度目の地獄を、リオは見た。

「お前のせいだ」と誰かが言った。

四度目で、リオはもういいと思った。もうどんな好意にも縋ってはいけないと思い知ったのだ。心を寄せる傍から、安堵して寄りかかる傍から、破壊されていく。壊れていく。

「お前のせいだ」

そんなの、知ってる。

「お前なんか、呪われてしまえ」

リオの心に、決定的なひびが入った瞬間だった。

「また何かお悩みですか？」

突然、「現在」に引き戻されて、リオは一瞬ぼうつとした。

「あ……：ウイル」

「今、すごく悲痛な顔をしていましたよ。……どうしたんです？」

リオは顔を赤らめた。

「……いつから見たの？」

「五分ほど前でしょうか」

「ひどい」

ウイルは笑った。

「なかなか絵になってましたから。純白の花の中で、俯いているあなたが。リオは白が似合いますね」

お世辞っぽくもなく、気障っぽくもなく、こんな純粋な物言いは初めてで、リオは少し不意を突かれた。

「そう……かな」

「その銀の髪とよく合ってます」

ウィルはそう言っただけで屈み、花を摘んだ。リオは彼の指先が茎を干切っているのを見ていたが、ふと口を開いた。

「ねえ、ウィル？」

「はい」

「あなたとオーリエイトって、どういう関係？ オーリエイトは教会で働いてるわけじゃないって言ってたけど、聖者に会える人なんて限られてるでしょ？」

ウィルは憚る様子もなく答えた。

「オーリエイトとは小さい頃からの知り合いです。彼女は聖城の近くに住んでいて、時たま私が外に出ると、よく情報提供を頼まれました」

「情報提供？」

「女神の、ですよ」

リオは少しギクツとした。ウィルが自ら女神のことを話してくれるとは思っていなかった。この前話したのが心に留まっているのだろうか、事情を明かしてくれる気になっただけならいい。

「私や守護者たちを、女神が契約で縛り上げる理由が、悪魔達との活動と関連していると思っただけなのでしょう」

「それじゃ、女神は悪魔の仲間だってことにならない？」

「そうかもしれません」

立場上、断定することは避けたようだが、これは断定なのだ。リオは感じた。ウィルが顔を上げる。

「私に言えることは、馬鹿に聞こえるでしょうが……世界が危ない、と。それだけです」

実感はわかなかつたが、ウィルが言うのだから本当だろう。こんな場面で嘘をつくような人には見えない。

どっちにしろ、クローゼラはもうリオの世界を壊したのだ。あの夜、全部壊して焼き払ったのだ。

「嫌な人」

吐き捨てたリオを、ウィルはじっと見つめた。

「あなたが皆と距離を置いてるのは、その思い出のためですか」

「え……？」

「何かを思い出していたのでしょうか？　なくしたものを想っていたのでしょうか？　女神がそれを奪ったのですか？」

リオは驚いて、眼鏡の奥のウィルの目を見つめ返した。色違いの視線が、眩しいとまで思えた。

「……どうして」

「そんな顔をしていたら、嫌でも分かります」

断言されて、リオは口を噤んだ。

「もう何も失いたくないから、得ることを拒むのですか？　それとも得たいと思うから、守るために突き放すのですか。……ああ、両方でしょうか」

一言一言が、リオには強烈だった。どうしようもない強さでリオを押し。

強い。花園で涙を零していた青年は、本当はこんなにも強い。

「あなたは」

思った矢先、ウィルが微笑んで言った。

「あなたは、強いですね」

意外なことを言われて、リオは目を瞬いた。

「自分が得ずとも、与えることができる。強いですね」

強くなんかない、とリオは思った。耐えるのも辛いのも、あまりに多すぎて麻痺しているのだから、ほとんどの時はあまり感じなくて済むだけだ。そんなのは強いとは言わない。慣れというのは強いということじゃない。その分、幸せには弱くなるからだ。こうして手を差し延べられることに、たくさんのものを受け取ることに、無

償の温もりに。

「そんなんじゃない」

リオは首を横に振った。

「そんなんじゃないよ。そりゃ、あたしは強いよ。強いから、弱いんだよ。闇に強い分、光には滅法弱いだよ」

もう、ウィルからの強い押しに抵抗する術を失っていた。

「怖い。分かっているのに、引き込まれていくのよ。受け入れることであたしは皆を傷付けてしまうんだよ？　なのに、あたしはまた繰り返そうとしてる。受け入れたくてたまらない。受け入れたら消えちゃうのに」

ふと、肩に重みを感じた。ウィルが肩に手を乗せていた。

「……そんなことも、見ているんですね」

はつとリオは顔を上げた。彼は、まだあまりよく知らない相手のはずだ。クローゼラに通じている人だ。なのに、どうしてこんなに真っ直ぐに、自分を見てくれるのだろう。

「辛いでしょ。そういうことに気付くのは。ですが、あまりに全てを見つめていると、耐えられなくなります」

ウィルは身を屈めてリオの視線に合わせた。

「目を逸らすこと、逃げることもしないと。あなたは闇を受け入れ過ぎるようです」

リオは顔を上げた。リオは確かに、闇を拒めない性格だった。全部受け入れて、溜めてしまう。それを見抜かれていたことにも驚いたし、その相手がウィルであることにも動揺した。目の前の顔は柔らかに笑んだ。その行為自体が、とてつもない強さでリオに沢山の光を注ぐ。

「あなたは、強いですよ」

この人は、とリオは思った。リオと逆だ。弱いから、こんなにも

強い。強く強く押してくる。

「目を逸らしてしまってください。大丈夫、あなたは見なくても、ちゃんとそれが存在していることを知っているようですから」

ものすごく抽象的な言葉ではある。しかし、的確に要点を突いていた。奇妙な震えがリオに走った。この数日間、彼はどれだけリオを見ていたのだろう。こんな少ない間に、ここまで心中を見抜かれていたなんて。リオはあふれそうになっていた涙を拭いて、ウィルを見上げた。

「ありがとう……あなたも、強いね。目を逸らせなんて、普通は言えないよ」

そう返すと、ウィルは少々瞠目してから笑った。

「参りましたね。上手く返されました。あなたの力になればと思ったのに、また与えられてしまいました」

ウィルは少しリオを見て笑み、優しく聞いた。

「でも、あなたも受け取って、くださいましたか？」

リオはどうしようもなく頷いた。ひどく救われた気分だった。嬉しかった。

「では、もう一つ」

ウィルはリオの手をとって、掌に先ほど摘んだ花を乗せた。そして、リオに囁く。

「あなたに」

言葉が、花の香が、リオの中に無限に広がる。拒否という退路は絶たれていた。受け取るのは怖かったけれど、それでも受け取ると幸せだった。リオはウィルの微笑を泣きそうな気持ちで見つめた。

やっぱり、この人は強いのだ。たぶん、実質的にリオよりずっと。

第14話 少年

庭園を散歩するのは、既にリオの習慣になっていた。特に怯えなければいけない相手もないから外に出るのは平気だったし、皆それぞれにやりたいことがあるらしいので相手をしてくれる人もなく、やることのない時はここに来るに限る。花を眺めているだけで、時間は勝手に進んでくれるのでありがたい。

「リオ」

声がかかって振り返ると、ライリスだった。相変わらず我を忘れて見つめてしまいたくなるような笑顔を綺麗な顔中に広げて、ひらりと手を振っている。ここしばらくまともに話をしていなかった気がして、リオは彼女に微笑みかけた。

「ライリス」

「やあ。よく花園にいるね、リオ。花が好きなの？」

「好きじゃないならともかく、嫌いな人なんて、そうそっいらないでしょう」

まあね、とライリスは笑った。

「あ、クレニアが咲いている。珍しいな、こんな山の中で。さすがは聖者の庭ってところかな」

クレニアがどういいう花かは知らなかったが、彼女の口調はごく自然で、いかにも詳しそうだった。

「ライリスってもしかして、花に詳しい？」

「ん？ そうだね、詳しいほうだろうね」

少し皮肉な笑みが、ライリスの横顔に一瞬ちらついた。

「薬草の勉強は随分したから。させられた、って言うほうが正しいけど」

「ふうん……もしかして、ライリスって家出中？」

リオがぼつんと聞くと、ライリスはじつとリオを見つめた。思わず顔がほてる。

「だってどう見ても良い家の御令息……じゃなかった、令嬢だもの」
令息という言葉が令嬢以上に似合う令嬢も珍しいが。ライリスはくすくすと笑って首を振った。

「ここまでとは思わなかったよ、リオ。まあ、当たり前とおこ
うか」

「貴族？」

「まあ、そんなようなもんな」

答えているようでうまくはぐらかしている。ふと急に、彼女を天才と評したアーウインの言葉が蘇った。うかつに探りを入れると逆に揚げ足を取られそうだ。ここは切り込もう。

「それなら、守護者って何かも知ってる？」

「まあね」

明瞭であっさりした答えに、リオは面食らった。

「……ええと、アーウインがそれらしいのよ」

「うん、聞いたよ。まあ、薄々感づいてたし。あの魔力だもんなあ
食らいついていけないことが分かって、リオは諦めた。

「君はどうして」

ライリスが言った。

「ぼくに探りを入れようとしてるの？」

さすがにぎくりとしてリオはライリスを凝視した。何食わぬ顔で、
彼女は丈の高い赤い花を、観察するようにいじくっている。

「……他のみんなは引っ掛かってくれたのに」

「甘い」

言っで、くすり、とライリスは軽やかな笑いを漏らした。

「大方、自分の呪いとお母さんの死因が、オーリエイトのやること
してることやウィリアムに繋がってると思ってるんでしょっ？」

リオは開いた口がふさがらなかった。

「良い推理だよ。ぼくもそう思うし」

「ライリスには負けたよ」

リオは溜め息をついた。彼女はくすりと笑う。

「どうも。君は一人で何でも背負ってしまっタイプなんだろうね。でも、無茶すぎるよ。教会の力の強さは計り知れない」

「王家よりも？」

ライリスは一瞬表情を揺らした。

「場合によっては」

リオは沈黙した。自分のいた教会には、権力のけの字も感じられなかったのに。

「とにかく、ぼくに探りを入れるのは的外れだよ。何も出て来やしないよ。ぼく自身のこと以外は」

「……じゃ、ライリスもとりあえずは部外者？」

「部内者の線を跨いだ自覚はないな」

そう、とリオは言って顔を伏せた。何だか気落ちしてしまった。

彼女がとても非凡に見えたから、何か知ってると思っていたのに。「聞くなら、全部知ってそうな人にしなよ。ほら、ウィリアムさんがだめならオーリエイトとか」

自分で言って、ライリスは口をつぐみ、眉をひそめて首を傾げた。

「あの子、不思議な子だよ。同じ年には見えないよ」

「……ライリスはいくつ？」

「十六。オーリエイトも十六だって言ってた」

あたしより三つ上ね、とリオは思った。

「そうだね。世話もよくしてくれるし、お母さんみたい」

ぷ、とライリスが笑った。

「お母さん、ねえ……まあ、確かにあの世間離れた冷静さは、むしろ老成してる見えるよね」

確かに、年齢に似合わぬほど冷静で、世間慣れしていて。それに、年齢に似合わぬ魔法技術の高さ。いくら魔力が強くて、杖を扱えるほどになるには、二十年はかかると言われている、とライリスは教えてくれた。十六で杖を持っているオーリエイトは破格に相当す

るらしい。

「ところで、君は本当に魔力がないの？」

唐突に問われて、リオは目を瞬いた。

「ええ……うん」

ライリスは首を傾げた。

「じゃあ、君の呪いはよっぽど特殊なんだね」

ライリスもどうやら、リオの呪いに興味があるらしかった。

「ライリスは何か分かる？ この呪い」

ライリスは肩をすくめる。

「何も。ぼくはそんなに魔法の仕組みについて詳しいわけじゃない

よ」

「そう……ありがと」

一体自分の身には何が起きているんだろう、とリオはぼんやりとした不安に包まれていた。

部屋に戻る途中、リオは見かけない人物に出会った。白が目眩しい回廊を、庭を眺めながら部屋に帰ろうとしていたリオは、ライトブラウンの髪をした少年がオーリエイトと話しているのを見つけた。

「本当にそれだけなの？」

オーリエイトが聞いている。いつもより格段に刺のある声だった。

「本当だってば。つれないなあ、もう。予期せぬところ出会えたんだから、もう少し喜んでくれてもいいのに」

「あなたが何かで動くと、必ず企みがあるような気がしてならないのよ」

少年は拗ねたような顔をしていた。

「ひどいよ、オーリエイト。クローゼラのおつかいだってば。ウィル以外には用はないよ」

「……私たちのこと、報告する？」

「したら、君が困るんだろう?」

オーリエイトは黙った。遠目にも、睨んでいることが分かる。

「だったら、僕に選択肢はない。言わないよ、誓って」

少年が笑ったのを感じた。朗々とした声で、落ち着いた口調はどこか得体の知れないものを感じる。

「そんなに力まないでよ。他の客には顔を見せない。君だけに会いたかったんだから」

「……私がここにいるって、よく分かったわね」

「エリオットのところに行くって聞いてね。ウィルのところによるんじゃないかって思ってた」

「……そう」

「君の事はよく知っているつもりだよ」

オーリエイトは答えない。わずかに戸惑うように視線を逸らした。「それとね」

オーリエイトが顔を上げた。少年は素早く、その唇にキスをした。こっそり見ていたりオはそのまま固まって動けなくなり、オーリエイトも顔を真っ赤にして、小さな声で怒鳴った。

「ちよつと」

「久々だからいいじゃないか」

にっこり笑った少年は、全く悪びれずに言った。

「怒らないでよ。これで満足したから帰るよ。今ウィルはどこ?」
「神殿」

オーリエイトは吐き捨てる、足早に立ち去った。残された少年は、笑みを頬に残したまま振り返り、顔だけ出して覗いていたりオに気付いた。少年は目を瞬いた。

「こらこら、鼠の真似はやめなさい」

至極落ち着いた様子で言い、苦笑しながらリオのそばに歩いてきた。怒っているふうはないので、リオは逃げもせず、彼を迎えた。彼はまだ笑っていた。その瞳が灰色の混じった淡い紫色をしているのに気付いた。また、魔法使いだということになる。

「さつき見たことも、僕を見て話しをしたことも、他の人には内緒だからね」

‘カッコいい’より‘綺麗’の形容が似合う少年は、リオにそう囁いた。リオは少し後退って相手を見上げる。

「どうして？」

「あまり表沙汰にはしたくない用事で来たからだよ。それに、オーリエイトが困る。それとも、口止め料が欲しい？」

にっと笑った笑顔は、油断ならなかった。首を傾けた拍子に揺れた彼のライトブラウンの髪は、陽光をはじいて金の色を見せる。少し目を瞬いて、リオは彼が、自分がクローゼラの使いで来たと言っていた事を思い出して口を開いた。

「……そうだね、クローゼラって誰なのかを教えてくれれば」

答えた少女を、少年はじっと見つめた。すっと目を細めて、リオを検分するように。

「ふうん、クローゼラを知ってるんだ。只者じゃないね、君。だれ？」

「あなたこそ」

リオはひるまずに聞き返した。少年は面白そうに笑う。

「へえ……やっぱり只者じゃないね。オーリエイトの知り合い？」

オーリエイトの名が出て先程の頬へのキスを思い出し、リオは少し怯んでしまった。

「うん……そう。そうだよ。あなたはオーリエイトの何なの？」

「それを気にしてどうするの？」

リオは少しムツとした。

「気にするよ！ だって、あたしの……命の恩人だもん」

いつも無愛想で、でも、心配してくれてることも、優しくしてくれてることも感じていた。少年は命の恩人と聞いて、何かピンときたらしかった。

「ああ、じゃあ君がウィルの言ってた不思議な女の子か」

何を話したの、ウィル。

「そんなに警戒しなくてもいいってば。僕はウィルと仕事で一緒なんだ」

それを聞いて、リオは直感した。

「あなた、ガーディアン？」

少年は初めて驚いた顔をした。

「誰に聞いた？」

声と表情が急激に冷たくなった。驚いて下がったリオは、壁に退路を塞がれて壁に張り付く。

「オ、オーリエイトに……正確にはウィルとオーリエイトに」

少年はしばらくリオを見つめていたが、やがてリオから離れた。

「……なら、信用するよ。とにかく、ここでのことは誰にも内緒だからね」

「あたし、そんな約束した覚えはない」

リオが噛み付くと、少年はオーリエイトにした時と変わらぬ素早さでリオの額に口付けをした。仰天して声も出ないリオに、彼は不敵な笑みを向ける。

「約束の印。祝福というより呪いだと思って受け取って」

笑って人差し指を唇に当てて。キザに見えないのは見事としか言い様がない。

「秘密は守るんだよ」

リオは慌ててごしごしと額を拭いた。なす術もなく呆然と彼の後ろ姿を見送る。

名前すら聞かなかったことに、後々になって気がついた。

第15話 レイン

完全に怒りの表情で帰ってきたリオを見て、リディアは啞然とした。

「どうしたの？」

聞かれてもリオは振り向きもせず、息も荒く部屋に閉じこもった。屈辱と言ってよかった。口封じのための口付けだ。唇ではないだけマシだが、知らない男にそんなことをされるいわれはない。

「何なの、もう！」

頭を抱えても冷えるわけはなくて、リオはいてもたってもいられずに、部屋を猛烈な勢いで行き来していた。

「リオ」

とんとんと戸を叩いて顔を覗かせたのはオーリエイトだった。

「昼餉よ」

リオは弾けたように立上がり、オーリエイトを戸の内側に引っ張り入れて、戸を閉めた。オーリエイトは目を白黒させた。

「何の真似？」

リオはあの少年との「約束」を守る気などさらさらなかった。言うなというなら、何がなんでも言っただけやる。

「あの人、誰なの！ あの紫色の目をした人！」

オーリエイトは表情を隠そうともしなかった。眉を寄せて、警戒するような顔をする。

「会ったの？ 彼と」

「誰なのよ、あれ。油断ならなそうなのよ」

「何を言われたの」

「会ったことは誰にも話すなって。来たことを知られなくなかったんだろうけど、あなたは知ってるんだから聞いてもいいでしょ？」

オーリエイトは溜息をついた。

「……見ていたのね」

リオは一瞬言葉を途切らせた。そういえば、覗き見だった。しかし、後に引く気はさらさらない。

「誰なの」

「レインよ。レイン・オースティン。ウィルの部下の一人」

知りたかったことはこれで分かったが、リオの気はおさまらなかつた。

「彼、一体何の用で来たの？」

「そのことなだけで」

オーリエイトは、怒りが微塵もない落ち着いた声で言った。彼女こそ、唇にキスされたことはもう忘れたのだろうか。

「荷物をまとめて。明日には発つ。ウィルがグラティアに帰るところになったのよ」

これには気をそがれて、リオは目をぱちぱちと瞬いた。

「あ、そうなの……」

「どうしてそんなに怒っているの」

リオは返事につまり、ぷいっつと横を向いた。

「本人に聞いて」

「大方、口封じにキスでもされたんでしょう」

オーリエイトが溜め息混じりに言った。リオは黙っていたが、頭に血が上ったことは感じた。勢いよくオーリエイトのほうを向き、激しい調子で聞いた。

「あの人ってキス魔？」

「キス魔……」

オーリエイトはぼかんとし、少し笑いをこらえるような顔をした。珍しいその表情に、リオは一瞬気を取られた。

「そんなんじゃないの。あの人、どうしたら相手を怒らせられるか、良く知っているだけ」

あまりいい説明にはなっていない。しかしオーリエイトも、その

レインとやらを良く知っているみたいだ、とリオは思った。

「彼のことは気にしないでいいわ。どうせそのうち再会することになるから」

あまり嬉しくない慰めだ、というツツコミは心の中だけにしまうことにした。

考えてみれば、一日三食きちんと食事を取れるようになったのは最近だ。逃亡生活中は、水が見つかったら、それだけで生き返る心地だったのに。満足行くまでお腹を満たして、リオは部屋に戻って荷物の整理を始めた。リディアも、今まで大半の時間をリオの部屋に押しかけて過ごしていたので、リオの部屋にある荷物をとりに、ひっきりなしにリオの部屋に入ってきた。ノアは姉の周りについて回って、時折手伝いもしていた。

「少し寂しいわ」

手を止めて、リディアがそつと言った。

「なんだか元からここに住んでいたような気分なの。そう思わない？」

リリスのノートを荷物に詰めるかどうか、リオは少し迷った。が、プライバシーも何もあったものではなく、出発の準備で皆走り回っていて、いつ何時誰が入ってくるか分からないので、仕方なく、迷う暇なく鞆の中に押し込めた。我ながら泥棒まがいの行為だと思っが、ここはウィルのための屋敷であり、自分の母とウィルは（今知っている限りでは）関係ないのだから困らないだろう、と半ば無理やり納得した。でも、せめてウィルに、面倒を見てくれたお礼だけは言っておこうと思った。

ウィルは書斎にはいなかった。大抵の時間は書斎にいたのだから、ここでなければ神殿だろうと予想がついた。それに、今日は安息日

で、お祈りの日でもある。

しかし、この屋敷、山奥にもかかわらず広い。数日で全て探検し尽くしたはずもなく、リオは神殿がどこにあるかを知らなかった。やはり明日別れる時にしようかと考えあぐねていると、アーウィンが通りかかった。

「やつほ、リオ。探し物？」

気楽に声を掛けてくる。

「ううん、そうじゃないの。神殿ってどこにあるのか知らない？」
すると、アーウィンはああと行って笑った。

「うん。ちよつと遠いけど。庭を抜けて、いつか君と会った東屋のむこうに道があるから、そこをもつと奥にいったところにあるよ」
よく探検したものだ、とリオは目を丸くした。とりあえず、教えてもらった道を辿った。神殿がどういうところかにも興味があるので、多少遠くても気にならなかった。

神殿は屋敷とはだいぶ離れたところにあつた。聖なる場所に相応しく、外観は眩しいほどの純白だ。教会堂とは違い開放的な造りで、階段を上ると外からでもウィルが祈っているのが見えた。邪魔しては悪い気がしてウロウロしていると、ウィルの方から気配を感じて振り向いてくれた。

「リオ」

ウィルは驚きと嬉しさと戸惑いを混ぜた表情をした。意識してやるとき以外は、ポーカーフェイスはできないらしい。

「ごめんね、お邪魔しちゃって」

リオはおずおずと神殿に足を踏み入れた。

「お祈り中だったの？」

「ええ。でも気にしなくていいですよ。……何かご用ですか？」

「お礼だけは言っておこうと思って」

ウィルはきよとんとした。

「お礼？」

「あたしが言うべきことでもないような気がするけど。とにかく、いろいろお世話になって、ありがとう」

ぺこっとお辞儀をすると、ウィルは笑った。

「そんなにかしこまらなくていいですよ。私こそお礼を言わせてください。……いろいろお相手してくれてありがとう。楽しかったですよ」

リオは笑った。

「お祈りって、何を祈ってるの？」

あとは、好奇心にかられて質問してみた。

「神様に下界の報告をしているだけです」

リオは目を丸くした。

「神様なんて、本当にいるの？」

「いるみたいですよ。もつとも、私は一方的に話しかけるだけで返事をもらったことはないですから、伝わってるかどうかでさえあやしいですけど」

「じゃ、何で祈るの？」

「儀式みたいなものなんです。実際、わずらわしいことを考えなくて済むので悪くないですよ」

へえ、と呟いてリオは天井を仰いだ。きっと、年に一度ウィルがくるかどうか分からないだけの場所なのに、見事な壁画が施されている。

その昔、神々がまだ地上にいて、自ら世界創造を行っていたという。リオが大好きで、よく母や神父に聞かせてもらっていた神話だ。降魔戦争も神話の一部だが、それはあまり好んで語られない部分である。今見上げた天井にも、その神話に基づく神々が描かれていた。明るい陽の光が皆さんさんと降り注いで、淡く神殿内の全ての風景をぼやけさせている。

「神様の声って、聞ける人はいないのかな」

「天使なら聞けますよ。天の使いと言うくらいですから」

リオはウィルを振り向いた。

「じゃ、リディアならできるかな」

ウィルはさあ、というように肩をすくめた。

「リディアはハーフですからね……どうでしょうか」

ウィルは少し首を傾げた。

「神と話してみたいですか？」

うーん、と言ってリオも首を傾げる。

「そうね、聞きたいことはいっぱいあるかな」

そのとき、ウィルが急にリオの腕をひいて、祭壇の下に押し込んだ。びつくりして叫ぼうとしたリオを、彼は制する。

「誰か来ます。隠れていてください」

わけが分からないまま頷くと、ウィルは大丈夫ですよ、と囁いてまた祈っているふりを始めた。すぐに、軽やかな足音が響いてきた。

「ウィル」

聞き覚えのある声だ。ウィルは祈るふりをやめて振り向く。少し驚いた顔をしたが、これはポーカーフェイスではないだろう。

「レイン。まだ発っていなかったのですか」

ウィルは部下にも敬語を使っている。聖者でありながら立場が弱いのだろうかと思ったが、リオは今二人の会話に神経を集中させていた。レインというのは、あのキス魔の名前だと思い出したのだ。

「少し見て回っていたんだ。ここは全然変わってないね」

「変えようとする人がいませんから」

ウィルは平然と答えて立ち上がった。祭壇の下のリオには、ウィルの姿だけが見えている。立ち上がるとウィルは高い。レインも十分長身だったが、ウィルよりは下だろうと想像できた。

「そうだね。……少し報告に来たんだ」

レインが語調を改めたので、ウィルは眉をひそめた。

「資料庫の呪文符にかけられてた呪文が解けてるみたいだよ」

祭壇の下でリオはドキリとし、ウィルはほの少しだけ眉を動かした。

だが、ポーカーフエイスを買いた。

「誰か、中に入れた？」

「ええ、まあ。でも、私は資料庫に呪符が埋めてあることすら知らなかったし、解く方法など持っていませんよ」

レインが黙ったところを見ると、ウィルが言ったのは本当のことのようだ。

「私の見張りにきたんですか？ 呪符まで調べて」

「クローゼラからのお達しだよ。呪文が解けたことがクローゼラに伝わってたんだ。どっちにしる、僕たちは逆らえないじゃないか」

ウィルが目を逸らしたのが見えた。

「資料庫に入れたのは誰？」

「オーリエイトです」

存外はつきりした声で、ウィルは答えた。

「オーリエイト……」

レインの声が揺れた。

「またそんな、危ないことを……」

「クローゼラには言いつけないでしょうね？」

雰囲気で、レインがウィルを非難の目で見つめているのが分かった。

「そりゃ、ね。そうできないことが分かって入れたのかい？」

「用心のためですよ。リディアなら入れなかった」

くすりとレインが皮肉げに笑うのが聞こえた。

「相変わらず、素直な振りをして意外と目算するよね。ま、いいけど。ただ、軽はずみなことをするなって言いたかったただだよ」

「いわれずとも」

ウィルが答えた。

「新しい呪符を用意するよ。呪符担当が僕でよかった。じゃあ、気をつけて」

互いに会釈すると、レインの足音は遠ざかっていった。

リオが祭壇の下から這い出たときには、ウィルはまだ複雑そうな顔をして、彼の後ろ姿を見送っていた。

第16話 星空

星が空に輝いていた。もちろん、その数に限りはあるのだろうが、あまりに多すぎて「無数」としか形容できない。

リオは飽きる事なく花園に出て来ていた。ここはすっかり気に入っていた。人の手が加わっているのではなく、自然の花園ならもつと良かったのに、と多少残念ではあったが。

ずっと昔、まだ母が生きていた頃に、星は消えるんだ、と教えてもらったことがあったな、とぼんやり思い出す。ならどうして北極星は消えないんだろう、と不思議に思ったものだ。

「リオ」

優しい声がして振り返ると、ウィリアムがいた。リオは笑った。

「こんばんは。良い夜ね。……あなたとは、大抵ここで会うね」

「私もそう思いました」

ウィルは屈託なく笑った。

「でも、偶然でもないんですよ。私もここで考えごとをするのが好きなんです」

「え」

リオはバツが悪そうな顔をした。

「ごめんね。あたし、横取りしたことになるよね」

「いえ、そんな」

ウィルは少しびびくりした顔をした。

「誰かと共有するほうが、嬉しいですよ」

全く純粹にそう言っているのが分かって、リオは毎度のごとく驚嘆した。リオから見れば、彼は十分大人と呼ぶに足る年齢だった。

その彼がこんなに真っ白い物言いをするなんて、新鮮だった。その金と青の色違いの瞳をしげしげと眺めていると、別の声がかかった。

「リオ」

リディアの声だった。リオは嬉しくなって手を振り、ウィルは丁寧にお辞儀をした。リディアは彼の姿を見て少し首を傾げたが、気にせずノアの手を引いて側まで来た。

「あなたも出て来ていたのね、ウィル」

「はい」

リディアはリオの隣りに座って、ノアを膝に乗せた。ノアは遠慮なくその指定席に収まると、嬉しそうに空を指差した。つられるようにして皆が天を仰ぐ。

「綺麗な星ですね」

ウィルが言った。リディアとリオは同時に頷いた。

「ねえ知ってる？ 星って消えるんだって」

リオが言うと、皆が一斉に振り向いたので、リオは面食らった。

ウィルが初めて鋭さを交えてリオを見た。

「どこでそれを？」

「お母さんが教えてくれたの」

リオはびっくりして、ありのまま正直に言った。柔らかくて優しいウィルしか知らなかったので、かなり驚いた。

「私も聞いたことあるわ。星って、今世界にいる人の数を表してるんですって。だから、死んだ人の分星は減って、生まれた人の分増えるって」

リディアも言う。ウィルは目を細め、二人の少女を見やった。

「正しい、とっておきましょう。神話の創世記の一節です」

いつもより少し低い声で、彼は言った。

「リオ、あなたは神話に詳しいのですか？」

「え？」

「もしそうなら、クローゼラがあなたを狙うのはそのせいかと。知り過ぎた者の抹殺です」

リオは仰天してうろたえた。

「そんな、たかが星で」

「創世方法に関する情報は、漏洩が最大の禁忌ですよ。星が空にあるのはなぜだと思いますか？」

答えたのはリオではなくリディアだった。

「天界に近いから」

ウィルは今度はリオを見つめた。

「私、天使のハーフだから、ほら、天界の事情には少し知識があるのよ」

リディアはウィルの色違いの視線に射竦められ、肩を縮めて言った。

ウィルの瞳は不思議だ。優しく和ませれば温かな柔らかさを持つが、彼がその気になればゾツとするほどの鋭利な冷たさを放つ。

姉の緊張を敏感に感じ取って、ノアは果敢にもウィルを睨んだ。

ウィルはそれを見て呆れたように言った。

「無謀ですよ、ノア君」

聖者を相手にとるとしたら、もっとも過ぎる忠告だ。

「まあ、とにかく、あなた方が只者ではないと身に染みて分かりました」

「そんな、あのね、ウィル」

言いかけて、リオはまた口を閉じた。

ウィルは空を見上げて悲しそうな顔をしていた。諦めとも安堵とも、絶望ともつかない表情。とても目が離せず、強烈な印象が脳裏に焼き付いた。

「世界を守りたいと、あなた達は思えますか」

リオもリディアも、ノアでさえ、神聖視される青年をなすすべなく見つめていた。

「もし、思うなら」

ウィルはそこで言葉を切り、ひとつ息を吸った。その唇が紡ぎ出したのは歌だった。

「暁の空に星ひとつ 海に落ちて波ひとつ
赤い花は地に落ちて 青い花は天を舞う」

リディアのそれとはまた違い、透明な印象を与えるその歌声は、不思議な旋律に乗って星空に渡る。

「摘んで刈って 摘んで刈って

最後の星は溶けて消えた

あなたの星はどこにある？

星の鍵のありかには

ひとつふたつと花が咲く」

ウィルは歌い終わるとリオ達を見つめた。リオは首を傾げて、真つ正直な感想を述べた。

「変な歌ね」

旋律も奇妙なら歌詞も奇妙極まりない。ウィルはそれを聞いて一瞬目を白黒させたが、やがて苦笑した。

「そんな単純な言葉で片付けばいいのですけれどね」

「え？」

ウィルは目を閉じて息を吐いた。

「今の歌は、私が、生まれた時から頭の隅で覚えていたものです」
リオとリディアは目を見合わせた。どうやらただの歌ではないらしい。

「誰かに歌ってもらった覚えもなく、私の他にこの歌を知っている人も聞いたことはありません。なのに、どうしてか、ずっと知っていたんです」

この話も歌に負けず劣らず奇妙だ。

ウィルはふつと視線を上げる。金と青が、宝石のようにきらりと光った。

「世界を守りたいと、思えますか」

歌と世界とがどう関係があるのだろうと首を傾げたリオだったが、ハツと気付いてウイルを見つめ返した。ウイルもリオが気付いたことを知って微かに笑った。リオは力強く頷いた。

「守りたい」

ウイルは悲しげに笑って、静かに頭を下げた。痛々しい感じさえするその動作に、リオは胸が一杯になった。リディアは困惑気味にリオとウイルを見つめている。

ウイルは顔を上げると、「明日は早いではありませんか。早くおやすみください」と言ってそのまま去ってしまった。

リディアは堪り兼ねてリオの腕を引いた。

「ねえ、どういうこと？」

「あの歌、創世に関係あるみたいだよ」

リオは言った。

「ウイルはね、世界が危ないって前に忠告をくれたことがあったの。あの歌、謎々なんだわ」

「謎々？」

リオは頷いた。

「ウイルしかこの歌を知らない理由があるんだろうけど、そこまではわかんない。それに、この謎々を解くにはもっといういろ知らないきやいけないと思う。ウイルはあだし達にこの謎解きを託したんだよ」

リディアはなお困惑した顔をしていた。

「なら、どうしてあんな悲しそうに笑うの？」

「本当はあだし達を巻き込みたくないんだと思う。オーリエイトと同じで」

リディアは目を見開いた。

「なのに、囚われの身である以上、ウイルは何もできないんだよ。それに、きつと今のような最高機密は直接的には教えられないんじ

やないかな。だから、あんな遠回しな言い方をしたのよ」

リオはウィルが消えた方を見つめ、溜息を吐いた。

「歌と世界とがどう関係してるのか、変だと思っただけど、それ自体が答えなんだよ。関係あるんだ、っていう」

リディアは目を丸くした。

「……初めて会って十日も経ってないのに、あなたとウィルったら以心伝心ね」

リオは苦笑した。

「そうかなあ」

「そうよ」

「だったら、ちょっと嬉しいかも」

リディアはちよっぴり微笑んで、それから目を伏せた。

「……可哀想な人よね」

「へ？」

「可哀想な人よね、ウィルって」

リオは何も言えず、ただ黙っていた。

「でも、少しだけクローゼラの気持ちが分かるような気がするわ。

あの人、閉じ込めておかないと、どのくらい多くの人を惹きつけてしまうか分からないもの」

リオは思わず同意した。彼の表情の一つ一つが鮮やかに脳裏に焼き付いている。リディアはほっつと息をついて続けた。

「でも彼は孤独なのね。絶対的に」

リオは頷き、足下に視線を落とした。

白く揺れている可憐な花々。それを「あなたに」と言っただけで渡してくれたウィル。体を震わせて、泣かないでと言ったりリオに、それでも涙を零しながら、はい、と返事をした。それでいて、さっきのような、油断のならない顔もする。さっと表情を取り繕った、あの素早さもすごかった。

「明日、さよならなんだね、ウィルと」

リオが言つと、リディアはリオを見つめ返した。

「あたし、もう少しここにいたかった」

リオの本心だった。

「リオ、あなた……」

言いかけてリディアは思いとどまってやめた。リオがそんなリディアにきよとんとしている、彼女はふるふると頭を振ってリオに抱き付いてきた。体の小柄なリオは少しよろめいた。

「どうしたの、リディア」

リオが困惑して言うと、リディアはリオに囁いた。

「なんでもないわ。ただ、色々なことが悲しいの」

「……………」

「何もかもが悲しいの。それでいて、とても綺麗だわ」

それから、リディアは腕をリオの肩にかけたまま、リオの目を覗き込んでふんわりと笑った。

「ウィルは大丈夫よ、きつと。見た目よりずっと強い人だって、オーリイからの折り紙付きだもの」

リオはリディアに微笑み返して、頷いた。

「知ってる」

それからリオは、呟いた。

「最後の星は溶けて消えた。あなたの星はどこにある？」

星の鍵のありかには、ひとつふたつと花が咲く」

少しそれを吟味して、リオは振り切るようにいった。

「覚えておいて損はないよね。いつか謎解きするのに必要な材料が揃ったら、一緒に考えよう」

リディアは頷いた。

二人はノアと片手ずつ手を繋いで、満天の星空を眺めながら屋敷に戻った。別れの前夜はこうして過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273i/>

EVER... -美しき穢れた世界に祝杯を-

2010年10月15日23時16分発行